

文樂座六門興行

人形浄瑠璃

四ツ橋

文樂座

銀五十

コロレアビムロコ

輯一第集作傑樂邦

Columbia



針音のこい

ニエエフコロレ

日本津太夫師吹込

澤留瑞

田智越道中おの

自二五〇八七
至二五〇九一

沿津里東路の段

二枚

自二五〇九二
至二五〇九五

平作内の段

四枚

自二五〇九六
至二五〇九八

平作腹切の段

二枚

三味線 友次弟
ツシ 友次弟
胡弓 友次弟

(也圓四廿金 入ムバルア術美 枚二十全)
社會式株器音蓄アビムロコ本日

文樂座火形浄瑠璃

三日目 豫定時間表

前 本朝 廿四孝

桔梗ヶ原の段(三時開幕の豫定)

御休憩時間 十五分間の豫定

景勝下駄の段(二時五十五分開幕の豫定)

勘助住家より物懸の段(四時三十分開幕の豫定)

御食事時間 二十分間の豫定

十種香の段より狐火追六時十五分開幕の豫定

御食事時間 二十分間の豫定

中 伊賀越道中双六

招津里の段(七時四十五分開幕の豫定)

御休憩時間 二十分間の豫定

女 妹背山婦女庭訓

道行繼の小田巻(九時二十五分開幕の豫定)

打出し(十時の豫定)

(舞臺装置 松田種次)

新らしき日本が獨り持

つ世界的興味

六月劇壇を茂捲す民る

族藝術の粹



晩秋不慮の災禍に喪失し其後本城を物色中
このほど四ッ橋に新築いたしました、而も

なほ之の眠り目なるはあの官兵助などに使
ひます。今では實盛なども之です。然し南

水漫遊などを見るに別になつて居るやうで
あります。それから矢張南水漫遊には素盞
鳴さありますのち今の所謂孔明と呼ぶ頭で
由良の助などにも使ふ事もあると云ひます
兎もあれ菅相丞や『薄雪』の兵衛、あるひ

は『紙治』の孫右衛門などを勤める首で、
矢張竹本座へ近松が書いた『日本振袖始』
から出た人形だと申します。それから若男

さいふのは源太とも呼んでゐるごが聞きま
すも持役としては『朝顔日記』の駒澤に『
太十』の重次郎、その眼隅へ張を入れ其眉

を引きつめるご『阿古屋』の重忠に成つた
りし他種類の若男は敦盛の役などをするご
云ひます。又所謂おやまの中にはおむすご

云つて之は勿論娘の事で『野崎』のお染『壺
坂』のお黒『妹背山』のお三論などを勤める

のもあります、南水漫遊に傾城さあるのも
多分のご同じものかご考へます。斯んな具
合で今云ふ南水漫遊には凡そ廿六種の人形
品目を擧げられて居るのであります。

今から見ては簡單なものに相違なかつた
けれど、後世人形と呼ぶ種類の物は、日
本でも遠い昔からあつたのであります。其

れは傀儡子に始まつたもので、傀儡子の名
は已に十餘年前に『和名妙』や『新猿樂記』
『雲州往來』に見えて居り、傀儡子の輪廓

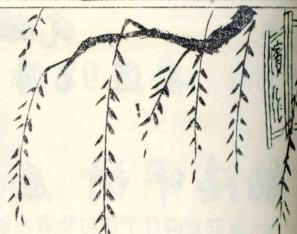
は、王朝末期の文章博士大江匡房の『傀
儡子記』に傳はつて居つて、傀儡子は遊牧
の民で、男は狩を表業に、木、偶や土

偶を舞はせたと御座います。其當時に、
四三と云ふのが傀儡を舞はせた事が『散木
奇歌集』に見えて居ります。手遣ひの幼稚

文楽座のお歸り
濱作の前で一盞お召上

濱作

新町



なものには相違なかつたでせうが、多少の糸
 が附いて居たかも知れない、云ふ想像は
 出来ない事もありませぬ。其後傀儡子は、
 門附が立上り命脈を維いて居たらしく御
 座います、淨土宗の起るに至つて、傀儡
 子の大方は淨土宗の行者になり、特技の人
 形を舞はして勸化の効を顯はしたものでら
 く、所謂首掛け芝居の形式ではあつたが、
 佛菩薩の本縁や、寺社の縁起、即ち謂ふ所
 の本地物を語る説經と結んで、人形舞はし
 は自然と諸國に擴がる様になりました。之
 れが人形舞はしの擡頭する遠因だつたと思
 はれます。而して、其内には例の三味線が
 渡來して來るし又お粗末ながら淨瑠璃とい
 ふものも出來た、即ち京都の目貫屋と云へ
 るが西の宮から人形舞しを誘ひ出して、茲

に始めて三味線に上した淨瑠璃、又それに
 合せて舞する人形と此三者が綜合される事
 になりましたの、慶長年中、即ち徳川の
 成りまして、忽ちにして京では四條五條の
 始頃です、或は江戸の堺町さか葺屋町さか、櫓
 如き或は江戸の堺町さか葺屋町さか、櫓
 む立つて此人形芝居が繁昌したのでありま
 す。順序として當然此頃には最上人形の類
 も増してはゐたのですが、然し舞臺などは
 固より無く其人形とて首があるばかり、遣
 ひ手の手も人形の着物の裾から袖口へ出さ
 れて舞されたもので、大阪の石井飛彈椽が
 始めて其手足の工夫もしたものですさか。由
 來此椽號なるものは人形師の所有なりしを
 後に淨瑠璃太夫の勢強くこれを専らにす
 るに至つたこの事。さて竹田のからくり人
 形が出來たり、野呂松ののろま人形が出

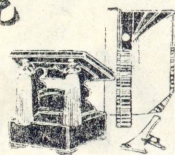
元阪木瑠璃太夫儀

具道り昌海 代共 夜為 見

電話船場
 一八六二番

助清中竹 屋島加

入〜西筋堂御目丁四町物唐區東市阪大



ふものも出来た、即ち京都の目貫屋さ云へるが西の宮から人形舞しを誘ひ出して、效

るに至つたこの事。さて竹田のからくり人形が出来たり、野呂松ののるま人形が出

電話船場
一八六二番

助産
入へ西筋

来たり、次郎三郎がおやま人形を使つたり、殊には彼の元祿時代になるご大阪へ義大夫が現はれて竹本座をはじめ、又近松翁が現はれて此義大夫節のために人形芝居に最も適切な名浄瑠璃を澤山書き卸し、しかも其人形遣ひとしては辰松八郎兵衛と云ふ名人が出て、今の出遣ひの如きも此人によつて始まつたご云ふのが、始めは此人形を下の幕ご上の顔隠し幕の間から出して遣つてゐたので、畢竟人形の動くに従つて自然遣ひ手の身体も動くごが見好くないから黒幕の陰に黒頭巾して遣つてゐたものを、愈々今度八郎兵衛が袴を着て手摺を離れ無量の手妻を遣ふに其全身少しも亂るゝ事がないといふ評判を取つたのであります。加之他方また豊竹座の出来るあり、即ち西

に東ご同じ大阪の地に於て大夫三味線、作者から人形遣ひご全く競争的に繁昌を來したのですから、従つて其進歩發達は眼覺しいものがあり、道具建から人形衣裳總ては美々しく立派やかを盡し、舞臺大幕の上にご小幕を引くやら山簾を本山の張りぬきにするやら、大夫も出語りをするやら、例へば人形にしてから先づ眼も動き、指先も動き、享保の末には竹本座『大内鑑』の與勘平彌勘平が腹をふくらまし、元文になるご豊竹座『武烈天皇儀』の佐手彦の眉を動かさしはじめるなど、非常に發達を遂たのであります。即ち言を換れば當時名人の遣ひ手が輩出した次第で、中にも吉田文三郎の如きは享保始め竹本座の『國性爺後日合戦』に初出勤、錦舎の出遣ひに片手の晴業を



はり歸お
の定指樂文
でクタンキ

示して以來さいふものは實に此人形についで工夫を凝らしたもので、其一例を擧ぐればある『夏祭り』の人形に始めて帷子衣裳を着せるほか、或は其遣つた一寸女房おたつ、看せるほか、或は其遣つた一寸女房おたつ、に桔梗の帷子黒縹子の前帯淺黄の綿帽子を着けさせた如き、今なほ歌舞伎で眞似てる所事實此時代さいふものは繰盛んを極めて歌舞伎はあれど無いも同然、幟は林立して其最負は凄まじい有様であつた云ひます。江戸でも矢張之と同じく、慶長の昔薩摩淨雲も淡路の人形舞しこ此人形芝居を始めて以來、各派の淨瑠璃芝居も誠に繁昌してゐたのです、享保に一端大阪の義太夫芝居も入つて來てから云ふものは又漸次に其勢力範圍を成つてしまひ御案内の同様に歌舞伎狂言などは全く此人形の眞似の

み演てゐたものであります。前云ふ辰松も三郎兵衛も共に江戸へ來て其妙技を揮つた事があるのです。兎も角も此人形芝居の全盛は凡そ百年間、寶曆から明和以後になる。漸次本場大阪でも亦江戸の方でも其勢力は歌舞伎に奪はれ、結局あの大坂の新興北堀江座すらも大した事には成らなかつたを見るべきであります。然し此間に在つても人形は其一個に所謂黒坊四五人も掛かり、或は出遣ひ二人も掛かる事、其他太夫の引拔早替などのケレン早業は愈々進歩を見せたので、而も操芝居としては前述の如く、其後は盛んならぬ各座の起伏消長が今日に至れり云ふ次第で、それも今や獨り當大阪の文樂座が現存するのみで他には語るべきが無いのであります。

南 一 温 泉 料 理

電 話 南 西
 七 七 一 五
 〇 一 三 二
 一 一 二 九
 〇 一 〇 三
 番 番 番 番 番

大阪四ッ橋



前
 本朝廿四

つた信玄の家來高坂彈正と長尾景春



桔梗ヶ原の段

前 本朝廿四孝

高坂彈正	豊竹駒太夫
越名彈正	竹本文字太夫
妻唐織	竹本鏡太夫
妻入江	竹本源路太夫
慈悲藏	竹本長尾太夫
草薙奴	竹本貴鳳太夫
	竹本長子太夫
	竹本龜久太夫
	鶴野澤重平

人形

慈悲藏 吉田玉松
 唐織 吉田光之助
 妻 吉田光之助

この淨瑠璃は武田上杉兩家の確執に齧藤道三の謀叛を取合せたる作にて『信州川中島合戦』『三軍桔梗ヶ原』等を藍本として更に趣向を立て技巧を凝らしたるものにて近松半二、竹本三郎兵衛、三好松洛等の合作で初演は明和三年正月興行の竹本座。桔梗ヶ原の段は三段目の口で内容は直江山城の慈悲藏が母の命令で信州桔梗ヶ原に我子を捨るこゝ通りが、

つた信玄の家來高坂彈正と長尾景勝の家來越名彈正(實説の保科彈正)が勤助の名に魅せられて、互ひに捨ひ取らふと争つたが高坂が妻唐織の入智恵で、遂に高坂が拾ひ得て歸るこゝに趣向でこれに越名の妻入江の廣言と逃彈正と槍彈正の俗諺の由來なごを絡ませてある筋であります。景勝下駄の段は三段目の中で桔梗ヶ原で捨子をした慈悲藏は勤助の名跡を嗣ぎたい一心で老母の難題を逆らわずに仕へるこゝ老母は圖に乗つて、杖で打擲するはづみに下駄を飛ばすこゝ其れを捧げて長尾景勝が訪れて横藏を軍師として迎へやうと頼む筋で景勝も下駄を捧げる件は支那の張良が下邳の橋で黄石公に香を捧げた故事を取入れたもので、信玄が雪中に勤

妻 入江 吉田文之助
 高坂 彈正 吉田玉徳
 越名 彈正 吉田玉市
 草薙 奴大 勢

景勝下駄の段

豊竹 つげめ太夫
 野澤 勝市

人形

慈 悲 藏 吉田玉松
 母 越 路 吉田小兵吉
 長尾三郎 景勝 吉田玉幸
 女房お種 桐竹紋十郎
 百 姓 大 勢

勘助住家の段

竹本 鍛太夫
 豊澤 新左衛門

勘助を訪れるのを玄徳も孔明の慮を叩いたのに型どつたと同じ趣向であります。

勘助住家の段勘助物語の段は三段目の切で内容の概括を申し上げます。美濃の齋藤道三が足利義晴を亡ぼして天下を掌握しやうと思つたが上杉武田のために妨げられて行衛を晦します。前年から法性の兜で争つて居た上杉武田は三年間休戦して反叛人の道三を索すここに盡力しそのためには上杉は景勝武田は勝頼と各々一子の首を暗けます山本勘助の子の横藏は義晴將軍の夫人と遺子を扶けて信州更科に匿つて置いたが夫人が病死したので遺児の松壽丸を我子に仕立て、武田信玄の軍師にならんとして故意と非道な行爲をして一家に辛く

當ります。武田家の高坂彈正の妻唐織は桔梗ヶ原で慈悲藏も兄の無理な詞を背きかけて捨てた峯松を抱へて勘助の住家を訪れ慈悲藏を武田方へ召抱へやうとする。慈悲藏は景勝の家臣なので其頼みを拒みます。妻のお種は我子の愛にひかれて決心を鈍らすので慈悲藏は手裏劍を投げて我子を殺します。慈悲藏は愛兒を殺して兄の首を得やうとしたが横藏は其心を察して眼を疵つけ、先きに雪中の筈掘りに托つて探がさうとした六韜三略を慈悲藏に與へ自分は父の名山本勘助を繼いで武田家へ隨身します。慈悲藏は直江山城守に歸つて互に忠勤を勵むさいふ筋であります。

十種香の段より狐火迄は四段目の切

勘助物語の段

竹本大隅太夫
鶴澤道八

人形

女房お種	桐竹紋十郎
弟慈悲藏	吉田玉松
後に直江山城守	
妻唐織	吉田光之助
母越路	吉田小兵吉
兄横藏	吉田榮三
後に山本勘助	

十種香の段

竹本土佐太夫
野澤吉兵衛

でこの段に織込まれたるところを申
ますと、上杉武田兩家和睦の爲さて
義晴の後室手羽女御前が勝頼と八重
が姫とを許嫁させます。大切には
道三が滅亡し、勝頼八重垣姫は芽出
度夫婦になるのです。十種香の場の
勝頼は實の勝頼で先に切腹したのは
花造りの養作であつたのです。仍ち
其處に取替子の面白さが湧いて来る
のです。濡衣は養作と通じてゐまし
た。濡衣は齋藤道三の娘であります
道三は菊造りの關兵衛で上杉へ忍び
勝頼も亦花作りとなつて上杉へ忍び
入つてゐたものです。狐火の水渡り
の事は支那西湖の故事であるのを諷
訪湖へ持て来たものであります。

桔梗ヶ原の段

M 名も山深き信濃路に、優しき花
の名に呼び、爰そ桔梗ヶ原とかや
甲斐と越後の領分に、分けて立てた
るさい目の塙所、秣を刈りにやつこ
らさ、一本きめた刀より、研立つ鎌
でぐわツさぐわさ、踏みあらしたる
名々が、主の威光を薙場の領。是も
同じく二人連、籠に柎を指荷ひ、見
て憐りのごつてう聲。詞ヤ下主め
うらむ部屋では、ついに見た事もな
いしやつ煩共、誰に斷り此秣を刈ほ
した。悪く言譯ひるいだら、二人共
に首が飛ぶ。盗人めらと云はせも立
てず。詞ヤ下主の口から下主呼ば
り、しやらくさい。恭くも甲州の
主、信玄公のお馬の飼料、うねらが

狐火の段

竹本南部太夫
野澤吉彌
鶴澤友平
鶴澤右衛門
鶴澤清二
琴野澤團三郎
野澤勝三郎

人形

娘八重垣姫 吉田文五郎
腰元濡衣 桐竹政龜
長尾鎌信 桐竹門造
白須賀六郎 吉田市松
花造り簀作 吉田扇太郎
實は武田勝頼
原小文治 吉田文作

知つた事でない、すつこんでけつか
れど、猶も引きぬく手先を捉へ。
詞ヤイ此印か目に見えぬか、甲斐の
領分は是より東、西は越後領分を書
て有るは、うぬらが目にかゝらぬか
盗人さいふたが誤りか。サア、何
さゝきめ付られ、返答こつり後か
ら、握り拳を二つ三つ。詞ヤア傍輩
をふたれては、後日に主君へ云譯立
たぬ。やぶれかぶれと二人の奴、い
ごみ争ふ折こそあれ。詞りやうんとも
づまれと、聲襤の裾げはらし、高
坂彈正が妻唐織、越名彈正の女房入
江、夫と指圖に、姦共、用意の腰か
け奥家老の女房と見るより下部共、
わかつてこそは躡まる。入江邊に心
を付け、詞誰ぞと思へばお廐の沓藏
百内、何故の争ぞ、事によりては

聞捨てられず、包ます語れと尋ね
ば。詞ハイ、喧嘩の元は馬の飼
料、信玄殿の家來さぬかし、此方の
領地へ踏込み、刃あらせし狼藉者、
我々に見付られ、云譯なさの揃合さ
語る中より最うよい。詞夫れで
さつぱり様子を知れた。國が變れば
心迄、變れば變はる。甲斐の國は、
すべて盜賊はやりしと、人の噂も嘘
ではないと、當てこすられて唐織も
勃とせしが押しづめ。詞互にお主
の確執より、おのづこ隔たる兩家の
中、家來の仕落は幾重にも、お詫申
す筈なれ共、只今のお詞に、すべて
甲州には、盜賊有りとおつしやつた
其一言も承りた。チ、唐織様と
した事も、何の根間に及ぶ事。元此
信濃は村上左衛門義清殿の領地なり

しむ、謙信様さ信玄様、兩人して切
り取り給ひ、此所にさい目の印、夫
れを知りつゝ狼藉せしは、あなたの
御家來、國の守の扶持人さへ是じや
物、ましてや町人百姓は、猶以て狼
藉するは知れた事。イヤおつしやん
な、印有りさは云ひながら、一つに
續し原なれば、過て踏み越えしも
いはゞ下郎の茹取る草。イヤ下郎
にもせよ、誰にもせよ、其過失をさ
せまい爲め、建てたる樺木は國家の
禁制、花咲く木々の枝までも、折取
るまじと記せしを、手折れば則ち落
狼藉、此領分の印に限らず、譬へ白
紙に書くまでも、事を制する理に等
しく、是皆國の教として、掟を守る
は貴人より、下々の掟とする、詞謙
信様の息のかゝつた領地へ踏込、草

一筋でも茹り取つたは、國を盗むも
同じ事、其儘に指し置ては、夫彈
正の落度、女房の身として見て居ら
れず、高坂様はともあれ私が夫彈
正殿、ついに一度も名を穢せし事な
ければ、お前の殿御さ一口には、ほん
に言ふても下さんすな。詞コリヤ面
白い聞所、お前の殿御が執權なら、
私か夫も執權職。イエ／＼そりやお
前の胸一つ、深い様子は知られ共、
侍衆の口癖にも、高坂様は逃彈正
こちらの夫は鎗彈正、人に勝れた鎗の
上手さ、逃足早いお侍さば、異名
さへ違ふ物、まして心の内外も違ひ
やんすさ、ほのめかす。詞イヤコレ
入江様、武士の身は情によつて、退
くも逃るも軍のならひ。チ、好い口
な事おつしやるな、情でそんな異名

を取る、武士の法がござんすかさ、
いはれて唐織堂惑の、何ぞせんかた
此の場の無念、廣言憎しと思へ共、
入込だ落度さいひ、夫をさみする詞
の端、聞くにつらさも彌増さる、涙
隠して入江様。詞花によそへ、名に
顯はし、非を改るお前の存分、か
へす詞も家來の仕落、今は此儘歸る
共、滿れば缺る道理にて、今日のお
禮は重れて急度。詞チ、そりやおつ
しやる迄もない、私か方に非太刀は
受けぬ、此以後主人の領分へ、露程
もお障り有らば、二度さ赦しは致さ
ぬぞ、殘す詞も針の先、眞綿に包む
唐織が、立ち寄る所をさむる下部
是非も涙の道筋を、左右へ、こそは
別れ行く。爰に信州、筑摩郡の邊に
住む、慈悲藏さ云ふ者有り、生得親

に孝心の、道は昔の郭巨にも、か
らで積る年の數、三十路の上は漸々
と、二つか三つの稚子を、抱き入り
たる懷の、内曇なる冬の空、寒さ
を凌ぐ種ならず、歎の種も形振も、
茫然としてなめり。詞ハ、誠や人間
の吉凶は、生るゝ時の運に任すこ
いふ、母の胎内を出でしより、誕生の
祝儀さて、ざんざん諷ふ悦びは、貴
人高位はいふに又ばす、下萬臣の我
々迄も、悦びを悦びを重るが親子の
縁、夫に引かへ其方は、わつか慈悲
藏が作さ生れ來るもそちが因果、親
の心子知らずと、我肌付くれば現な
く、結ぶ榮華も夢の夢、頑是なけれ
ど聞いてくれ。親として子を捨つ
るは、人間ならぬ境界と笑ひし此身
に廻り來て、今といふ今、其方を爰

に捨置き、此親が獨りの母へ孝の爲
め、捨つれば拾ふ神佛の、力をかつ
て成長せよ、親と思ふな、子でない
と、思ひ切つても切り兼ねる、産み
の母が歎きといひ、我も不愍さ身に
せまれど、そちをかばへば不幸と成
り、孝を立てればそちが難義、理に
せまりたり思ひ子を、捨つる此身の
孝行より、捨てらるゝおこさか孝行
惨いさばし思ふなよ、云譯涙目も明
かれば、そつと傍に置く土の、上に
臥したる稚子が、わつと泣き出す、
聲に恸くり抱き上げ、泣くを道理と
此所かしこ。詞山を越えて里へ往た
るの土産の見納めと、抱きしむれば
すやく顔、遠む童の氣散じと、打
ち守りく、名は慈悲藏の慈悲もな
く、今目前に捨て置いて、歸るこし

らぬ心根を、思ひ出だせば不愍やこ
いさ涙のやるせなき。詞ハア我な
からあやまつたり、心弱くて叶はじ
と、包み廻せ衣の香の、思ひば二重
胸の闇、元の所へ押直せと、知らぬ
子供の寢入ばな、一世の別れと經言
を、跡に残して雪國の、つもる歎き
さしられたり、かゝる折ふし、田妻
の國の執權、高坂彈正時綱、供人數
多引具して當所筑摩の御社へ、詣の
道も棒木の傍、件の捨子に眼を配ば
り。詞人首稀な街道に、捨られし稚
子は、犬狼の餌食は治定、見捨る
も本意ならずと、家來をさゝめ歩み
寄り。詞ム、最早嬰兒といふでもな
く、男子と見えて氣高き寢顔、卑し
からざる者の作、何故爰に捨置きし、
仔細はいかにと、見廻す小袖の付紐

に、付けたる下札手に取上げ。詞何々甲州の住人山本勘助も、讀みも終らず不思議の顔色。詞此山本勘助といふは、生國は三河の者、山賊に見えて魂は異國の韓信、孔明にも劣らぬ軍者、主人豫て御懇望、かゝる亂世の其中でも、諸方に招く今日只今、此稚子に名を記し、捨てたる主こそ芳しき。勘助を味方に入る、信玄公へよき土産。ヤア／＼者共、身も屋敷へ連歸れど、詞にはつこ若黨仲間、抱き取らんとする所。詞高坂殿暫くも、聲をかけたる立派の侍家來につかせし鎗印、長尾入道謙信が耶黨、越名彈正忠政、我領分に打ち通れば、高坂は甲斐の領、榊木を中に挟箱、不和成る中の兩執權、すは事こそ下部迄、片唾を呑んで聞

き居たる。詞イヤなに高坂殿、只今物かけより承れば、是なる捨子お提げ札に、出本勘助書付しゆ、お拾ひなさるゝ御所存、尤も存すれ共、見ます所双方の領分へ、かゝり合せし上げ、貴殿のまゝにも成ますまい、手前の主人長尾謙信、日頃望みし折に幸ひ、其姓名を書き顯し、爰に捨てしは某が、願ふてもなき忠義の一品、貴殿に遣つては武士が立たぬ。是非連れて歸りたくば、彈正が首諸共、左もない中はいつかな叶はぬ。ホ、さい目の論なら金輪際捨げにやならぬ稚子も、踏んだる足は手前の領分。イヤ左に非ず、物の始めを頭と云へば、此方の領分を枕としたる山本勘助、越後の國の旗大将、見事貴殿は拾ひめさる

か。チ、云ふにや及ぶ、我方へ踏延したる足元が、肝心要の甲斐の國、高坂彈正も拾ふて見せう。イヤ越名彈正が連れ歸る。イヤならぬこの刀の柄、理を非にさせぬ言葉詰。争ひ爰に二人の女房、ごくより立聞く此場の時宜、見やる眼も角菱の、めい／＼夫を押し隔て、高坂が妻威儀繕ひ。及ばぬ私の一思案、女の差出がましけれど、彈正殿聞かしてやんせ。詞甲斐と越後の領分へ、捨置きし稚子は、兩家に望む山本勘助、是を手筋に召抱える、お前方の胸の内、一方へ拾はれては、是非一方の國の恥其争ひの基となり、肝心の此子に乳も呑まさず、若しもの事が有つたらば、お望みも水の泡、何にもせよ兩方より、乳房含まし其時に、いづれ

へなりこそ呑付く方、夫を印にお拾ひあらば、ごちらにひけも劣りもないよ、私や思へども後や先、思案してたべ我夫よ、流石女の智慧の海、實に高坂が妻なりし。詞女房出かした。争ひ止むる乳房の鬪取、幸ひ其方が持合せし、乳を與へて試せん彈正殿も相應な、乳母でも有らば出だされよと、入江に當てたる言葉の端。聞くより嚇させき立つ入江。お

かもじ様の御思案に、鼻毛延した今のお言葉。詞越名彈正忠政も女房、乳母奉公は致さぬぞ、今一言おつしやつたら、赦しはせぬと腹立聲。詞ヤイ／＼馬鹿者、大事を前に聞きながら、無益の舌の根動かすな。イヤなに高坂殿、貢ふた子に教へられるさやらで、内室の言葉に服し、女房

々々乳を勧め、ごちらへなりとも方を付け、此場の別れば如何ござらう。ホ、そりや此方も望む所、呑むか呑まぬは互の運づく。唐織早くこすいめられ。だくつく胸も押しづめ抱上ぐれば目をばつちり、明けて三つの稚子が、わつこ泣出す口の内、乳房含めて嘘しても、呑む體更に見えざれば、見合す夫婦も顔と顔。詞コレ申し唐織様。何ぼう勧めさしやんしても、子供はごうでも正直な、私か代るご抱る取る入江。心に拜む神よりも、頼みに思ふ此乳を、たつた一口呑んでたもこ、揺振り歩けごけがな事、猶も正體泣叫けぶ。聲を止めんと手に汗を、握り詰めたるいたいけも、憎やと拗れて置く露の、頼みも綱も切れ果てし、入江が思ひ

唐織も、残り多きに又立寄り、嘘し宿めて抱上ぐれば、泣止む不思議女房より、高坂彈正大に悦ぶ。詞軍師山本勘助、信玄公の御味方よ、言はせも立てず。ヤア／＼くらい、詞兩方共に呑付かれれば、未だ善悪知れざる中、其方が連れ歸へる。其譚聞かんご詰めかくる。ホ、合點行かすばよく聞かれよ。入江殿も抱上ぐれば、泣くは治定。あの如く身も女房が手に在る中、泣かぬも縁有る是證據。又二ツには、甲州の住人、山本勘助ごあるからは、紛ふ方なき手前の領分。最前ちらご承りしむ、越後領へ指さば、此後は赦さぬこや

ら、ナソレ、御内實の言葉も有れば是連もまづ其如く、稚けれども甲州の町人、其元がお構ひあらば、却つ

て狼藉國賊の、名を取るか彈正殿に
先にかけてたる言葉の裏釘、折返され
てさしもの彈正、返答せき切る女房
入江。思へば無念と唐織が、抱きし
稚子無理やりに引取れば、わつと泣
く。是は無禮な入江様。詞さつきの
喧嘩に負けたるかばり、其子ばかり
は叶はぬと、彼方此方と挑み合ふ、
裳ほらく妻と妻、顔はほのめく薄
櫻、亂れ散つてぞ争ふ風情、一度に
わくる夫と夫。中にも高坂聲勵まし
實にやいたつて正直は、頭に宿る神
の慈悲、一陽の春を待つ。雪中の梅
にも優る主君の悦び、此身の忠義。
さればいな、お慈悲深い信女様の、
御威勢が顯れて、私か無念もたつた
今。サア申し入江様、最前のお言葉
に、お前の殿御を何とやらおつしや

つたが、今一言御所望と、囀る女房
詞ホ、聞きたくば名乗つて聞け
ん。長尾入道謙信の郎黨、越名彈正
鎗彈正。イヤモ天晴れ手練の此鎗先
受けてはたまらぬ大事の稚子、連れ
て手前は逃彈正。唐織來れと立別る
、胸に一物二人の彈正、爰に捨子
の隨一と、其名も高き山本氏、伴ひ
歸るぞ、ゆゑしけれ。

景勝下駄の段

M 秋の末より信濃路は、野山も家
も降りむ、雪の中なる白髪の雪、女
ながらも故有つて、男のすなる名を
名乗る、山本勘助と人毎に、岩間の
水の首絶えて、木葉の笥二つ三つ、
年も幼げ稚子を、賺すお種か手枕に
寢兒か守は何處へ行つた、山の薪を

ふいさつき、さらば爰らで一休。詞
お種女郎冷えますの。チ、正五郎様
月助様、雪吹で外は歩かれまい、お
茶も沸いてござんす。いやく構ふ
まい。子供は手か放されぬ。慈悲藏
殿は留主か、今日もけうと寄り合ふ
と彼の人の噂、お袋への孝行は申す
も愚い。兄への深切、ほんの子は次に
して、兄貴の息子の其次郎吉を、大
切にしらるゝ女天の衆の心意氣、名
も慈悲藏といふは道理。サレバイノ
夫れに又兄の横藏殿、兄弟とてあの
様にも違ふ物か、親への不孝さ、弟
へのむごさ、親兄弟にさへあれちや
もの、村中で持餘すが道理、外を家
と出歩いて、隣邊へだれ込、人
の娘、下女婢、當り合ひに孕まし、
其のおこもりのあの小伴も、親に似

た子の鬼子であらうと、口はさがない
 山道を、ゆがまぬ武士の梓弓、胸
 の袋に押し包む、孝をはづさぬ慈悲
 藏が、獵漁も母の爲め、流れに添
 みて立歸る。詞ナ、孝行者お歸りか
 佛性な慈悲藏殿、殺生に出られたも
 お袋への養ひか、夫程にさしやつて
 も、氣に入らぬあ婆様は、さりさは
 強つい片意地者。ア、これ、勿
 體無い事言ふて下さんすな、假令身
 を粉に碎いても、胎内に有るから、
 今日迄の親の苦勞に、比べて見れば
 百分一、あの鳩部屋の鳥でさへ、鳩
 に三枝の禮有るまで、諸鳥に勝れて
 孝行な鳥、何處からとも無う此家の
 軒に集つて来たのも、慈悲藏が心少
 しは通じ、類を以つて集つたかと思
 ふて、嬉しう思ひます。成程夫はこ

ちさらも、さる書物で見置いて。
 鳥は親の養ひを、育くみ返すといふ
 本文、俺が毎晩女房に、孝行にする
 心も通じて、烏ちかあくくかの顔
 去んで見やうと、出で、行く。詞母
 者人は最前から、未だお休みなされ
 てか、炬燵でお風引かしますな。お
 目の覺めぬ其中に、お肴料理して上
 げん、次郎吉も寢入つたか。ハイ此
 子が機嫌よふ育つに付けても、氣に
 かゝるは峰松も事。詞ほんに兄御の横
 藏様。いかに我子でないまで、捨て
 仕舞へど無理ばかり、お前が外へ
 出やしやんすよ、私を女房にせうの
 何のこ、辛い悲しい事聞くと、お前
 の孝行立てる爲さ、辛抱するにもし
 られぬは、眞實な子を胸慈な、餘所
 へ遣つたさ云はしやんすが、まあ其

先は何國の誰。詞ハテ夫を問ふが最
 う未練、氣遣ひしやんな、此貧家に
 置かうより、乳母に乳母を付ける結
 構な内へ養子にやつた、彼奴はきつ
 い果報者。最う思ひ出ださずと、こ
 んと捨てたと思ふて居や。病患ひと
 いふ事も有る、萬一先で死んだら、
 無い昔ちやと諦めて、俺や居る氣ぢ
 やと、云ひながら、犬狼の餌食と
 も、なりはせぬかこ子を思ふ、心は
 一つ一間の中、そつと窺ひ、是は扱
 詞寢入つてござるかと思へば、裏へ
 出て御氣丈千萬、お炬燵に火も有る
 か、追つけ御膳の用意もしやと、片
 時忘れぬ孝心は、又も類は嵐吹く、
 音も雪吹に高足駄、踏分け尋れ来る
 人は長尾三郎景勝、萬卒は求め易く
 一將は得難しと、此隠れ家の弓取を

幕ふて一人門の口、二重の腰の白妙に、枝も撓げの雪折竹、杖さ我子に助けられて庭に佇む老女の風情。詞申し、此大雪に、さりさては冷えまする、蒲團の上にござつてさへ、御老體の身の上、平にあれへと取る手を拂ひ。詞七十に餘つて愚鈍にはなつたれど、子供に物は教へられぬすべて親に仕へるに、起伏の介抱は誰もする、何事に寄らず、親の心に背かぬ様に、するの眞の孝行。寢てばかり居るも氣詰りに、雪の景色を見やうと思ふ、母が心を妨ぐるは何ぞ不孝で有るまいか。ア、一々誤り奉る。其段には心付かず、お年寄られて一日々々、御氣力の落ちるが悲しく、今日も猶に出で、元氣を養ふ谷川の、ますくお達者なる

様と志を捧げ物、賞翫なされて下されかし。詞イヤ、物の命を取る、夫が何の養ひ、眞實親の養ひなら、遠い山川の珍物より、つい裏にある竹藪の、筍を掘つて来い。ハア夫れは御意ではござれども、此寒の中に筍が。サア有る物を取つて来るは、子供でもする事。無い物を取り寄せるも眞の孝行。斯ういはい母の難題、吩咐ると思はふも、此位の難題に困る様な器量では、智者さ呼ばれて人に知らるゝ、弓取りにはならぬそよ。わらばお夫は天下に聞えし軍師、一生主人を取らず、過ぎされた忘儀、兄弟の子が器量を見定めるまでは、女ながらも夫の名を付け、山本勘助と名乗る此母。二人の内に勘助といふ名を譲り、父の軍法

奥義の巻を傳へやうと思へども、夫では中々勘助にはなれぬ。サア其苗跡を受たさに、心を盡す此の慈悲藏ソレ、其名が欲しさに孝行を盡すは、眞實の孝ではない。上皮の偽りは、眞實の孝ではない。苗氏の表裏。コレ夫はお情けない、苗氏の望むも出世して、母人の悦び顔、拜みたいばかり、兄者人の心入れさ、一つに思し下さるゝは、餘り無情い御心さ、雪に喰ひ付き落涙に老母は猶も腹立て聲。詞コリヤ、何ば利巧に言ひ廻しても、此の年月膝元を離れ、他國して、今日此頃俄かの親切はれが偽りといふ證據。儻も心に引競ら、兄を不幸さ云ひなす悪心、思へば見るもいまはしき、杖振り上げて打んます。老の力身に踏み挫く、駒下駄飛でよるめく足。コハ危なや

抱きこむれば。詞イヤくく、儂が世話は受ぬわい。其處退き居れ親と子の、心合さる片端の下駄、景勝隠さず拾ひ取り、御召物は候と、老女が前に押し直し、しごつて頭を下げらる。母つくくご打ち守り。詞じん骨柄只人ごも見えぬお侍、賤しい婆に履物を直されしは黄石公に沓を與へし張良が俤。ハテ奥床しい御方ちや、お近付にもなつて、篤とお禮も申したい。詞コリヤ慈悲藏、其方に用はない。立つて行け。ハアはつこ、何か仔細は有磯海、母の心を計り兼ね、是非なく奥へ入りにげる。いざ此方へと請すれば、辭する色なく座に直り。詞御推量少しも違はず、黄石公にも劣らぬ軍者、山本氏の御子息を召抱へて

一方の大將と頼まんため、身不肖なれども、越後の城主長尾謙信が嫡子三郎景勝、是まで參上仕らる、禮儀正しく述べられれば。詞扱こそく始めより自然と備はる御眼相。シテ御望みなさるは、兄弟の中、兄か弟か。イヤ景勝が望む所は惣領の横藏。ハテナ最前より御覽の通り、孝行な弟慈悲藏を差し置き、不幸な兄の横藏を、家來になされふと、おつしやるお前のお心は。イヤそりや其方に覺え有る事、諏訪明神の社内にて、面體恰好まつくりと、見届け置いた横藏、是非に身共が所望いたす。ム、左様おつしやれば思ひ當る。よくくと思召さばこそ、大名のお手づから、否やさいはさぬ此の

婆に、下駄を預けたまひしは、天晴敏き殿そかし。詞兄は只今他行なれど、此母が成り變つて、御家來に差上げふ。過分々々、其箱是へご取り寄せて。いかに老女。詞主従さなるからは、一命を捨て、忠義を勵む武士の慣らひ。言ふに及ばず、此方ごても一身を任す云ふ、固めの一品受け取られよ、若し異變あらば身の上たるべし。詞御念は及ばず、其時ば母が鬢首差し上げるか。家來にするか、二つの安否。後程々々。老女さらばご詞詰め。威風尖き北國武士、越後縮の物馴れて、引かぬ其場の信濃路や、別れてMこそは歸らる。

勤助住家の段
勤助物語の段

「こそは歸らるゝ。木曾山木立あらくれて、無法無徹を老舗にて、名も横藏の筋かい道、草鞋のひも降うづむ、餌竿かたげて門口より、母者人今戻りましたと、聲に老母かほやく顔。詞チ、兄、待兼ねました、此間はまア何處へいて居やつた。ハテこな和郎は、俺も足で俺があるくに、何處へなご飛び次第、飛びついでに戻りがけ、小鳥十羽ほど捕らうと思ふて、顔も足も切れるやうな。道理々々、サ、ちやつこ上りや、草鞋の紐、手づから母の慈悲藏も、足の湯をこる機嫌さる。詞兄者人、お足洗ひましょ。イヤコリヤ

、孝行な兄も體に不孝な弟が手をさへるは穢ららしい、母も洗ふてやりましょ、一人に娘らく一人には甘い女の鼻の先、泥脛突付け。詞エ、若い女の手の觸はるは好いものじやが、乾物の様な母者の手で、情の罪科じや、いか様おれは孝行者此小鳥も晩の夜食に、こなさんに食はずのじやない、焼いて貰うておれが食ふ氣、兎角おれも口さへ養へばこなさんの氣が休まるなう母者人、さうさも、あのまあ孝行な事わいの、サア、炬燵に火もして置いた、ム、こなさんが今迄あつて居て何の恩に着せる事、エ、こりやぬるい水炬燵じや。イヤ、あんまり強つい火は上つて悪い。それがたわけさいふもの、まう此方も追付け火

屋へ行く體、稽古の爲にきつい火にもあつて置かしやれ、サア足もんで下されさ、踏出す兩脛、慈悲藏見兼ね。ドレ私も立寄れば、また差し出るかこしやく者、兄や、斯うかくさ撫でさする、ほんそ息子のくはがら足。詞ア、逆もなら、美しいお種が採んで呉れりやよいに、ハア貴様子守か、峯松は何うした。ハイお差圖の通り、思ひ切つて、一昨日主か何處へやら。ム、捨てしまうたか、よい事々、一體おりや貴様に惚れて居る、時に幸ひも嫌のそげめはてこれて仕まひ、跡に残つた小悴の其の次郎吉、邪冤な餓鬼め、締殺さうかと思ふたれど、あぢなもので、子さいふ者は親よりちつこ可愛いものじや、又た大きくなつたら俺に似

て、孝行をも仕をるかと思ふて、貴様に育てますからば、ノウ慈悲藏、畢竟我身と相合の子、さてもの事に女房も相合にする合點、お種顔らずとウシと言やいの、それを否やいふと、慈悲藏が大事なる、この母に當るぞよ、コレしつかしつかと揉ましやれ、エ、まだ火がぬるいと戀の意趣を、炬燵に當る非道者、持てあましてぞ見えにける。折ふし表に先走り。詞山本勸助殿に用事あつて、大僧正武田信玄參上なりと案内に、思ひがけなき夫婦が不審、仔細あらんこ横藏が、起きも直らず空寝入り、ハテ扱て思ひよらぬ大身のお入り、卒爾には母も會はれまい、慈悲藏もてなせ、コレ横藏、是ばしたり何やら言ひく寝入つたさうな、

風邪引きやんなと一問の障子、引立て窺ふ表より。匂ふ留木の高坂が、妻と知られてうづ高き、雪の懐幼な兒を、抱いて幾重の柴の庵、家來を先へ追歸し、行儀正しく打通る訝しなむら手を支いて。詞信玄公のお入りと思ひの外なる女中のお名はチ、成る程御不審もつとも、偽りならぬ信玄公の、コレこの寝顔に對面なされと、いふに女房立寄つて。ヤア峯松が、戻つてかき、飛立つばかりの胸押しづめ。詞これはく御苦勞さまや、そんなら峯を貰ふて下さりましたはお前様か、いかにお世話さまに。コレく産相いふまい、甲斐の國へ養ふからは、最早一國の世繼、即ち今日の信玄公、孝心深き慈悲藏ごの、殊に軍術の達人と聞及び

師範もお頼みなされん爲め、わざく見やしやんせ、コレ愛らしい此の信玄が抱へに來た、お受け申されて宜からうと、恩をかけたる名將の情は胸にこたゆれど、まぼけた顔で詞コレはしたり、私は此の在所の山賤、鋤鋌の外何も存せぬものを、軍術の師範などは、勿体ない事、おつしやります。コレくこちらの入お前の器量を聞及んでさあるからはきつい譽な事じやぞへ、卑下するも事による。ハテ軍法奥儀は、母様の傳授の巻を譲り受けて。さればいい、夫を貰ふて山本勸助に成つたれば、抱へられまいものでもなければいまだ生もかへぬ中に、軍術の大將のさ、そりや山の芋を蒲焼にするやうなもの、名さへ慈悲藏さて、虫さ

へ得^わ踏^ふみ殺^{ころ}さぬ者^{もの}も、戦^{いくさ}に出て^で人^{ひと}の首^{くび}が、何^{なん}んとして^{して}くも、取^とつても付^つかぬ顔^{かほ}付^つに、唐^{から}織^{おり}ばつこ胸^{むね}迫^{せま}り。不^ふ調^{てう}法^{ぽう}な女^{おんな}の使^{つかひ}、氣^{いき}に入^いらひで被^{おほ}仰^{おほ}るのか。詞^{ことば}何^{なん}うあつても味^{あじ}方^{かた}に付^ついて貰^{もら}えれば、ならぬといふその譯^{わけ}は結^{むす}梗^{きやう}ヶ原^{はら}に此^{この}捨^{すて}子^こ、山^{やま}本^{もと}氏^ぢとある書^{かき}付^つを、印^{しるし}に拾^{ひろ}ひ取^とりは取^とつたれど、サア何^{なん}うも力^{ちから}に及^{およ}ばぬは、肝^{かん}心^{しん}の乳^{ちゆ}に吞^のみ付^つかず、なんぼ抱^だいてつぎ付^つけても、あつちくご指^ささして泣^ないてばかり、此^{この}大^{たい}將^{しやう}に兵^{ひやう}糧^{りやう}が無^なければ命^{いのち}も危^{あや}ふし。その兵^{ひやう}糧^{りやう}をついけるたつきは慈^じ悲^ひ藏^{ざう}ごの、お前^{まへ}の心^{こころ}に有^ありさうな事^{こと}、甲^か斐^ひの國^{くに}へ味^{あじ}方^{かた}についで、夫^{つま}婦^{よめ}して守^{まも}育^{そだ}てうと思^{おも}ふ心^{こころ}は御^ご座^ざせぬか、此^{この}のまあちつこの間^まにコレ何^{なん}處^{どこ}もかも細^{ほそ}つた事^{こと}を見^みやしや

んせ、道^{だう}理^りでもあり、眞^{しん}實^{じつ}の母^{はは}御^ごの懐^{なご}を離^{はな}れて、他人^{たにん}の手^てに何^{なん}の育^{そだ}たう、夜^よは得^わ寝^ねず、晝^{ひる}はうつく泣^なき寝^ね入^いりに、寝^ねた顔^{かほ}のいぢらしさ、ほんの見^みる目^めが悲^{かな}しいと、語^{かた}る中^{うち}より女^{によ}房^{ぼう}が、チ可愛^{かわい}や左^さ様^{さま}でござんせうと、ワツと泣^なき出す母^{はは}親^{おや}の、聲^{こゑ}に目^めさまし、しきみ付^つき、縮^{すぶ}る乳^{ちゆ}房^{ぼう}は一人^{ひとり}にて、この手^て柏^{かしは}の二^にた面^{めん}、まゝならぬこそ恨^{うらみ}なれ。一間^{いっけん}に母^{はは}の聲^{こゑ}高^{たか}く。詞^{ことば}コリヤく慈^じ悲^ひ藏^{ざう}、子^こ供^{ども}を餌^えに恩^{おん}にかけて、味^{あじ}方^{かた}にせんご後^{うしろ}きたない信^{しん}玄^{げん}に奉^{ほう}公^{こう}しては武^ぶ士^しが立つまい、さりながら、軍^{ぐん}法^{ぽう}奥^{おく}儀^ぎも傳^{つた}はらず、家^{いえ}の名^な跡^{あと}を繼^つぐ氣^きがなくば、勝^{かつ}手^て次^じ第^{だい}と没^{ぼつ}義^ぎ道^{だう}に言^いひ捨^{すて}て障^{しやう}子^しはたござす。ハアはつと立^たち上^あり、我^{わが}子^こを取^とつて引^ひ離^{はな}し。詞^{ことば}須^{しゆ}彌^み山^{さん}滄^{そう}海^{かい}の恩^{おん}

を受^うくればとて、母^{はは}の恩^{おん}にはいつかなく、信^{しん}玄^{げん}公^{こう}に仕^{つか}ゆる事^{こと}存^{ぞん}じも寄^よらず、變^{へん}改^{がい}申^{まを}す。コリヤ女^{によ}房^{ぼう}、一旦^{いつたん}捨^すてた此^{この}の悴^{せがれ}に、見^みぐるしい何^{なん}ほへる、縁^{えん}に引^ひかれて知^ち行^{ぎやう}取^とつては、末^{すえ}代^だまでの名^な折^せれ、親^{おや}子^この縁^{えん}をさつべりご、切^きつてしまへば信^{しん}玄^{げん}に、恩^{おん}もなく義^ぎ理^りもなし、これ此^{この}竹^{たけ}もその本^{もと}は、竹^{たけ}に雀^{すずめ}も離^{はな}れぬ中^{うち}、今^{いま}餌^えざし竿^{さな}さなる時^{とき}は、鳥^{とり}の爲^{ため}にば仇^{あだ}敵^{たかり}、事^{こと}に依^よつたら親^{おや}子^こ兄弟^{けいだい}、敵^{たかり}味^{あじ}方^{かた}さなるも武^ぶ士^し道^{だう}、お返^{へん}事^じはこの通^{とほ}り、幼^{ごう}兒^じつれて早^{はや}や歸^{かへ}られよと。詞^{ことば}するごに言^いひ放^{はな}つ。詞^{ことば}ハ此^{この}上^{うへ}は力^{ちから}なしとほ言^いへ、歸^{かへ}つて御^ご主^{しゆ}人^{にん}や夫^{とと}に何^{なん}と詞^{ことば}さへ、泣^なく抱^だき立^たち出^でづる。コレノウ峯^{みね}松^{まつ}一世^{いっせい}の別^{わか}れ、せめてイア、此^{この}の乳^{ちゆ}が一^{ひと}口^{くち}吞^のましたいと、慕^{した}ふ女^{によ}

房を引退けて、柴折戸がしやりの表にも、心は残る雪中へ、頑是涙の子を抱きおろし、襦袢の下くさり、括り添へたる後紐垣に結ぶは義理の綱、神や捨て置く竹の子笠、いたいけつむりに打着せて。詞山本の氏を繼ぐ慈悲藏ごのを、軍術の師ご頼まんと、これまで來給ふ信玄公、何うも此まゝでは歸られず、是非とも味方につくさいふ一言を聞くまでは、此信玄は、其許の門口を立去らず、雪に凍えて死すまでも、こゝに座を占め返事を待つ、大將の命助けうご殺さうご、御思案次第、よい返答を頼み入るご、鎮をかけたの雪の笠、思ひを殘し捨て、行く。詞ヤアそんなら坊はまだ行かぬか。コリヤく門には誰もない、よし居てからがあ

かの他人、今傍へ寄るごな、信玄の恩を受けた事になつて、母の一言が反古になる、此實戸の外へ一寸でも出るや否や、夫婦が縁も之きりご、腰さげの紐鐙をくくる酷さは我ながら、いかなる悪魔鬼か蛇か、六韜三略の望ある慈悲藏、慈悲もなさけも知つては居れご、母の詞ばそむかれぬ。詞で、何うで乳房に放れたもの、逆も無い命、凍えて死なば死次第、そちもソレ其子を袖にしては、兄貴への義理が立たぬぞ、ハア何かにまぎれて、大事の孝行怠つたり、ドレ裏へ行つて雪の中の、笥掘つて進ぜうご、篋笠取つて打ちかつぎ、あつき親子の縁を斷つ、緞ふりかたげ。詞、此の寒氣に荒男でさへたまらぬもの、餘尺もない身体に、ア、子を捨

つる敷は有れご、親の詞は捨て難き文彌、裏の敷へご踏分ける、雪より先へいごし子の、埋もれ死なん不慰やご、見合す顔に降る涙、鬩争ふ濡れ翅、情る、夫の後ろ影、いかに望めあればさて、天にも地にも一人子を、ようむごたらしう捨てられた。詞、今の女中も氣の強い、置いて去ぬ程なら、お家に寢さして去んだがよい、可愛やく、餓じからうに、ちつごの間など抱きたいご、任せぬ辛さ次郎吉を、漸々そつご下に置きさし足ながら庭に下り。覗けば門にしよんぼりご。詞ヤレ坊よ、それがまあ何ご命もあるものご、明けんすれご、鐙に、錠の代りの眞結びは、酷やつれなさあせる程、雪にしめつて開かぬ戸に乳たいくも絶えく

の、風にうたてや次郎吉が、ワツミ泣く聲、ハア悲しやこ、またかけ戻り抱き上げて雪やころ、ん霞やころいん、こぼそも何んたる因果ぞや、此の子憎いぢやなれども、我子に乳が呑ましたい、コレちつこの間く、寝入つてたもいのこと、心も空ばかきくらし、又降りしきる白雪に外に泣く聲八寒地獄、劔を呑むより身にこたへ、思はず知らずまるび下り、砕けよ破れよの念方に、外る、戸より身は先へ、コリヤ坊よく我子を肌はだに抱き締め、流涕なみだこがれ泣く聲に、唐織小蔭からむすをつゝと出で、詞信玄公しんげんこうを抱き上げ、乳房ちちうぶをふくめ参らすからは、慈悲藏じひざうは最早此方の味方、夫かたに知らせ喜ばせんと、勇んで館へ立歸る。はつこお種も心づき

うろつくひまに何處より、懐劔なつかいてうご峯松みねまつが、肝先貫ぬき息絶えたり。コハ何事なにごとと驚くうち、次郎吉引立て横藏よこざうが、一間をさして駈け入れば。詞ム、扱あつかは我子の害がいがいになるご横藏の所爲しわざぢやの、義理も情も最うこれまで、敵を取らいで置かうかと、死骸しかがいを小脇こわきにかい込んで、常には弱き女氣も、怨うらみに強き力帶ちからおび、奥へうかいふ忍しのび足、早や日も暮くれに近づきて、鐘かね孝行かうぎやうの道みちぞとて、古きためしの跡を追ふ、干故かんこの闇やみに白妙しらたえの、道も涙に見え分わかかす。詞なんば拙ちやくつても筒たけのこがあらう様ようはなれれど、親を思ふ一心しんをあはれみ、天より授かる事もやさ心にこめて一尺二尺、底そこは白羽しろはの鳩一羽とび、飛んで折しも飼ひなれし鳥も心こころや有るやらんと、又掘り返せ

ばまた一羽、友呼ともよび誘まよふ生類なまがたの、有様ありさまつくづく打守うちまもり。詞最早入相いちばんあいらし、諸鳥しよ塘たにに歸かへる頃とき、一羽ならず二羽三羽集あつり來きたるはハテ心得こころえず、誠まことや兵器へいきある地ちには、鳥群とりぐらをなすさいへり、我父わがちちは日本の軍師ぐんし、此所このところにて世よを去り給たまふ。一生いっせそらんじ置おかれたる、六韜りくたう三略さんりやくの秘密ひみつの巻まき、此の下に埋うめ置おかれしやらん。扱あつかは我が孝心かうじん天てんに通つうじ、鳥類とりるいこれを知らせしか、ハア有難ありがたい忝かたじけな、心勇こころいんで拙ちやくうがつ、雪ゆきも散亂さんらんむら雀すずめ、はつこ立つたる數かずの中なか、うかやふ兄あにが煩わづら魂たま。詞ム、野のに伏勢ふくせいある時は、歸雁きげん列れつを亂みだる、油あぶら斷たの塘たにを窺のぞふ悪鳥あくちう、殺さうと生かさうと手ての中なかの雀すずめ、鎚たに手てこたへ此下このしたを。コリヤ待まちて慈悲藏じひざう、埋うめんである傳授でんじゆの一巻いっくわん、我われには遣わやぬ、兄あにが出

世の種にするわい。兄者人、そりやお前無理でござりましょ。サイヤイ無理いふも兄の威光、阿呆鳥の孝行でかし、邪魔な汝から仕舞ふて取るごつこいさうばなりませまい、苗字を繼ぐは此の慈悲藏、見事われむ。ついで見せう、小癩な退けと鋤と鍬落花微塵の雪飛んで、合掘出す箱の二人が争ひ。合道と非道の二筋を、さぐりこけつ掴み合ふ、はずみにがばさ取り落し、池にざんぶと水烟り騒ぐ群鳥、兄弟も、不思議と見ざる後より障子ぐわりと母の老女、兩人待て。詞兄弟共に武士となり、主人を取るべき時節到来、雪の中の笥を掘出したる慈悲藏、今こそ母も心に叶ふた、天晴れ孝行出かしたくそちば最前言ひ付けた通り、裏口四

方に氣をつけよ、ナ合點か。ハア委細承知仕るさかけ入る弟、横藏は池中の箱を引上げて、母の御前にさし出だせば、詞サア、兄、そなたには分けてよい主を取らする、即ち主人より下されし、装束も改めさせんさ、しづく、奥の白臺に、無紋の袴、白小袖、かたへに三方九寸五ガ我子の前に直し置く。詞母者人こりや何じや、いやさコレこの白装束は何の爲。チ、それこそは冥土のはれ着、只今そちが首打つて、身代りに立てるのじやばやい、エ、イ滅相な事ばかり、此の首を身代りせば、そりやまあ誰か。今日そちが主人さたのみし、長尾三郎景勝公の御身代り聞及ぶ武田信玄、越後の謙信室町の御所に於て、互に我子の首打つて、

心底をあらはさんさ、契約ある由、最前そちを召抱へんきて來られし、景勝が面体そちが顔にさも似たり、扱はさ母が推量違はず、箱の中に殘されし、此の一通に委細の様子、詳かに記されたり、主従なるからば命は君に捧げしもの、武士の因果さあきらめて、潔う死んで呉れ、コレ、よう思うてみやしやれいかに主じやきて、まだ知行も呉れぬ内に、殺そうさいふやうな、胴怒な主があるものか、イヤ、どうこの主従さんと變改。イヤ左うはなるまい、いつぞや諏訪の森に於て、殺さる、そちが命、助け置かれし景勝の恩、忘れはせまい、その時の情は今身代りに立てんため、智謀の良に罹りしこそ知らざるか、恩を知らぬ

ば人ではないぞよ、たこへ逃げてもし
此の家のぐるりは、景勝の家來取巻
いて、一寸も遁ればない、切腹する
か、但しは母の手に掛けうか、サア
く何さく詰めかけられ、籠中
の鳥の目ばうるく、透を見て逃
だす、膝にはつしと手裏剣に、尻居
にごつたり詮方なく。詞是非に及ば
ぬ、もうこれまでで腹切り刀取るよ
り早く、右の眼に突込んだり、さす
がの老母も不審顔、流るゝ血を押拭
ひ押拭ひ。母者人、景勝に似たに依
つて身代りに立てたがる、小面倒な
此のつらに、斯う疵付けて相好變へ
れば、もう身代りの役には立つまい
今日只今父が苗字を受けつき、山本
勘助晴義、軍法奥儀を胸に貯へ、三
略の巻より大切なこの命、ヤアく

謙信が家來直江山城之助種綱、それ
へ出よ、言ひ聞かす仔細ありと、呼
ばる聲に一の間の内、見参さうと慈
悲藏も、優美の骨柄長上下爽やかに
詞某長尾の家臣たる事、深く包ん
で故郷へ歸りし其の仔細、母人には
密かに語り、兼て申し受けたる兄者
人の命、現在の子を捨てたも、否應
言はさぬ命の無心、去ながら、眼を
くつて身を全うする大丈夫の魂、
あつたら勇士を殺すは残念、長く謙
信に仕へ、忠勤を盡さるべし、と言
はせとあえず嘲笑ひ。詞おろかく
謙信づれが家來には、汝等も分相應
身が主には釣合はぬ、まこと山本勘
助があむむる主人は、悉くも足利
十三代の公達、松壽君、これへ誘ひ
申されよと、詞の下に高坂が、妻の

唐織次郎吉をかしづき申せば。山城
親子、ハアはつこばかり飛びしと
恐れ入つたるばかりなり。勘助まん
中にどつかま直り、詞ヤイ山城、只
今打つたるこの手裏剣は、先年室町
の館にて、此の公達の御母、賤の方
を奪ひ取り立退、折から、景勝目あ
てに打ちかけたる我小柄、只今我手
へ慥に落手、山本の苗字を引興さん
と軍學に心をこらす所に、武田信玄
大僧正、妾をやつし只一人、密に庵
へ來らせ給ひ。詞足利の行末覺束な
し、汝我が力さ成つて、事を媒れと
名將の一言心魂に徹し、ハア畏り
奉るも、即座の領筆、兵矢の誓ひ
詞チ、其時に此母も只人ならずと思
ふたが、扱は武田信玄公と主従の契
約仕やつたの、チ、サ、大魚は小池

に任ます、鶴は枯木に巢を喰はず、
 智勇兼備の大將に、頼まれ申せし身
 の面目、直ぐ様都に馳せ上り合うか
 っし時しも箱の騒動、詞義暗公はあ
 えなき御最期、ハツア詮方なし、懐
 胎の賤の方、人手には渡さじと、忍
 び入つて御家の白旗もろ共守り奉
 り、合立退く箱は八方に、提灯炬火
 散る花の、合都をあこに遠近の、雪
 の信濃路こ、かしこ、合月の更科の
 片山里に、人知れずかくまうとば、
 さしもの母も御存じあるまい。詞知
 らなんだく、コレ／＼左うして、
 御母賤の方の在所は何國、サ、い、
 さうじやん。ハテ申すも便なきこ
 さながら、憂きこもつもる産後のな
 やみ、果敢なくこの世を去り給ふ、
 詞あこに残りしあの公達、勿体なく

も我子と偽り、治郎吉よ治郎吉よと
 呼ぶ度々の空恐ろしさ口惜さ、弟
 嫁が乳を幸ひ、我子を捨てさせ、他
 家のあの子を養育する我心底、我
 儘無法は一物ありと悟りし老母、雪
 の中の筈、を掘つて見よとばあつ
 ばれ明察、げに勘助が母人ぞや、穢
 をいさひ今日まで、埋み置きたる雪
 中の、筈これにありと箱おつとつて
 さし上ぐる、源家正統武將の白旗、
 詞神明を頭にいたやく善兵の旗擧げ
 謙信親子只今より、此勘助も幕下に
 付けと立ち歸つて言ひ聞かせよと、
 一つの眼に天が下、見下す富士の山
 本勘助、三國無双の弓取りなり。山
 城大きに感じ入り。詞信玄景勝不和
 なるも、互に心を疑ひ合ふ、忠臣觀
 符を合すが如し、君御在家知る上は

景勝公の言譯立ちて、身代りにばも
 う及ばぬ、追付兩家和睦の基。成程
 々々最前裏で直々に、様子を聞いた
 信玄公も勘助様、言ひ合せのある事
 は、一家中へもお隠しあれば、夫高
 坂も露知らず、抱へに來た慈悲藏殿
 は、思ひもよらぬ長尾の御家來、君
 の御事始めて聞いた使の面目、此上
 なしと喜びの、中に歡きは一人の孫
 かう心かたけるなら仕やうもやうも
 あらうもの、詞此婆が偏屈から、信
 玄方の恩うけては、立たぬと云ふた
 一言で、直江も手にかけて殺しやつた
 は、即ち母も殺したも向然、コレ／＼
 嫁女、ゆるして。ア、勿體ない
 乳房にはなれて死ぬ命、思はず知ら
 すお主様のお役に立つたも因縁と、
 泣かぬ顔するいちらしき、母は一間

の一巻たづさへ。詞不幸と見えし勸助は、却つて父の名を上げる。二十四孝にまさりし孝、器量もそろふ二人の子供、軍法傳授のこの一巻、頂戴しやささし置けば。勸助取つて押戴き。詞父の苗字をたまれば、勸助が身の規模は立つ、母方の氏をつぐ弟直江の母への孝、其徳によつて此の一巻は、其方に下さるゝ、御恩を忘れず猶この上、孝行忘るゝ事なかれ、景勝の忠臣は、我胸中に徹したれども、詞心得がたき親謙信、君に弓引く逆臣ならば、汝も従ふ心やいかに、言ふにや及ぶ、我子を切つて二君に仕へぬ此山城、兄とば言はさぬ敵味方、この三略の恩を仇、一合戦仕らん。チいさもあらん出かすく、我また主君に仕ふる甲斐

の、天目山にたて籠り、出合ふころは川中島、運に乗じて越後の出城諏訪の城まで押寄せ、さも目ざましき勝負をせんす。詞ホいさぎよし、さりながら、かりにも一旦景勝に、受けたる思は何と何と。チ、日月にたさへたる、右の眼は越後へ進上、二心なき勇士のかため、母に與へしかたしの下駄、景勝のこゝろざし、捨つるば武士の道ならずと、左の足にしつかさ履き、下り立つ庭の高ひくも、道はゆがまぬ弓取り、直なる竹の根元より、はつしと切つたる旗竿は、詞勢運めでたき大將の合さそふはかしこき御笑顔、眠れる花の死顔に、抱いてゆぶつてすかしても、返らぬ普唐土の、二十四孝をよのあたり、合孟宗竹の筍は、雪

さ消え行く胸の中、氷の上の魚をこる、それは王祥これは他生の縁と縁合黄金の釜より逢ひ難き、この子寶を切りはなす、弟が慈悲のどうよくと、兄が不孝の孝行は、我が日の本に一人の勇士、今に名高き山本氏武田の家の礎と、事跡を世々に残しける。

十種香の段より狐火まで

行水の流さ人の業作む、妾見かばす長上下、悠々として一間を立出で、詞我民間に育ち、人に面を見知られぬを幸ひに、花作りさなつて入込みしは、幼君の御身の上に、若過ちやあらんかき、餘所ながら守護する某それと悟つてか、へしや、ハテ合點の行かぬささしうつむき、思案にふ

さがる一ト間には、館の娘八重垣姫許嫁ある勝頼の、切腹ありし其日より。一ト間所に引籠り、床に繪姿かけまくも、御經讀誦の鈴の音、こなたも同じ松虫の、鳴く音に袖も濡衣が、今日命日の甲ひの、位牌に向ひ手を合せ、詞廣い世界に誰あつて、お前の忌日命日を、甲ふ人も情なや父御の悪事も露知らず、お果なされたお心を、思ひ出す程おいごしい、嗚や未來ば迷ふてござらう、女房の濡衣が、心ばかりの此手向、千部萬部のお經ぞ、思うて成佛して下さんせ、南無阿彌陀佛、誠に今日ば霜月廿日、我身替りに相果し勝頼が命日、暮行く月日も一年餘り南無、幽靈出離生死頓生菩提、詞申し勝頼様、親と親との許嫁、在りし

様子聞くよりも、嫁入する日を待兼れて、お前の姿を繪に書かし、見れば見る程美しい、こんな殿御と添臥しの、身は姫御前の果報ぞ、月にも化にも樂しみは、繪像の傍で十種香の、煙も雪花となりたるか、回向せうさてお姿を、繪にはかゝしはせぬものを、たましひかへす反魂香名畫の力もあるならば、可愛さたつた一ト言の、お聲が聞きたい聞きたいご、繪像の傍に身を打ふし、流涕ごかれ見え給ふ、詞あの泣き聲は八重垣娘よな、我名を呼びし勝頼を、誠の夫と思ひ込み、甲ふ姫と甲ふ濡衣、不慙さもいぢらしさも、云はん方なき二人が心と、そゆる涙にけれむ、詞ア、我ながら不覺の涙と襟かき合せ立上る、後にしよんぼり

濡衣が、詞申し藝作様、合點のゆかぬはあなたのお姿、どうした事で此やうに。オ、不審尤、はからずも謙信に、かゝへられたる衣服大小、テモ扱も、衣紋付きなら上下の召様まで、似たさはおろか矢張其ま、かたみこそ今は仇なれこれなくば、忘る、事もありなんぞ、讀みしは別れを悲しむ歌、かたみさへちやに我夫に、みぢん變らぬ此お姿、見るにつけても忘れぬ、詞私や輪廻に、迷ふたそうな、御ゆるされてご伏沈む、泣聲もれて一問には、不審立聞く八重垣姫、そつと襖の隙間もる、姿見紡ふ方もなく、ヤア我妻が勝頼様と飛立つ心を押沈め、正しうお果なされしもの、似たさ思ふは心の迷繪像の手前も恥しと、立戻つて手を

合せ、御經讀誦の鈴の音。勝頼公は濡衣も心を察して聲曇り、詞ばなき女の心から、歎くば理り去りながら、定めなき世と諦めよと、諫むる詞こなたには、心空なる其人の、若やながらへおはすかき、思へば戀しくなつかしく、又覗いては繪姿に、見比べるほど生寫、似せて矢張りほん／＼の、勝頼様ぢやないかいのと、思はず一ト間を走り出で、續り付いて泣給へば、はつこ思へごさあらぬ風情、詞こは思ひ寄ざる御仰せ我等藝作と申す花作、漸々只今召しかへられ、衣服大小改めたし新參者勝頼とは覚えなし、御簾相あるなご突放せば、詞ム、何と云やる、今父上にかへられし新參者、花作の藝作とや、自さした事が、餘りよう

似た面ざしの、もしやそれかき心の煩惱、二人の手前恥しなから、詞コレ濡衣、此藝作とやら云ふ人を、そなたは疾うから近付きか。エイ。いやいの、知る人であらうがの。アノお姫様とした事が、たつた今見えたお人、なんのまあ私か。イヤ隠しやんな今の素振、忍ぶ戀路さいふやうな、可愛らしい仲かいのさ、思ひもよらぬ詞に悔り、詞オ、お姫様の仰有る事わいの、人にこそよれ、なんのあなたに勿体ないさ云やるからば、どうでもそなたのしるべの人か、イーエ、さうではなけれ共、大事のお主の目をかすめ、忍び男を捨へるは勿体ないさ申す事で御在ります。ム、すりやしるべの人でなく、殿御でもない人なら、どうぞ今から自

を、可愛がつてたもる様、押付なむ媒を、頼むば濡衣さま／＼と、夕日まばゆく顔に袖、あでやかなりし其風情、詞オ、お姫様とした事がまだお子達と思ひの外、大それたあの藝作殿を。サア見染めたが戀路の始め、後とも云はず今爰で、媒せいと仰有るのか。我折れ、ほんに大名のお娘御さて、油断はならぬ戀のみち、品によつたらお取持ちいたしませうか。コレ／＼濡衣、必らず塵相云ふまいぞ。サア何もかも私か吞込んで、ナ、吞込んでお取持すまい物でもないが、眞實底から藝作殿に御執心でござりますか、ま問はれて猶もあからむ顔。勤する身はいざしらす、姫御前のあられもない、殿御に惚れたま云ふ事が、嘘、偽に云

はれうか、詞其お詞に違ひなくば、何ぞ儘
 な誓紙の證據、それ見た上でお媒、オ、
 それこそ心易い事、其の誓紙さへ書いたら
 ば、詞イエ〜夫もこつちに望がある、私
 が望む誓紙も云ふは、諏訪法性の御兜、そ
 れが盗んで貰ひたい。ヤア何と云やる、諏
 訪法性の御兜を、盗み出せと云やるのは、
 扱てはあなたが勝頼様、と云ふ口押へて、
 詞ハテ滅相な勝頼呼ばはり、みちん覺のな
 い糞作、産惚ばしのたまふなと、云ふ顔つ
 れ〜打守り。許嫁計りにて枕交さぬ妹存
 中、おつ〜みあるは無理ならねと、同じ羽
 色の鳥つばさ、人目にそれと分られと、親
 ミ呼び又つま鳥と呼ぶは、生あるならひぞ
 や、いかに顔が似ればとて、戀しと思ふ
 勝頼様、そも見紛うてあられうか、世にも
 人にも忍ぶなる、御身の上と云乍ら、連添
 ふ私に何遠慮、つかう〜と御身の上、

明して得心さしてたべ、それも叶はぬ事な
 らば、いつそ殺して〜と、縋り付いたる
 恨み泣き、勝頼わざと聲あら〜げ、詞ヤア
 聞きわけなきたはふれ事、いかほどにのた
 まふとも、覺えなき身は下司下郎、餘所の
 見る目もは〜かりあり、そこ退給へと突放
 せば、詞スリヤ何の様に申しても、勝頼様
 ではおはさぬか、ハア、はつとばかりに
 糞作も、差添逆手に取給へば、こは御短慮
 と止むる濡衣、詞イヤ〜放して殺してた
 も、勝頼様でもない人に、戯れ事の恥かし
 や、心の穢れ繪像へ言譯、どうも生きては
 居られぬと、又取直すを猶も押留め、詞オ
 、遣は武家のお姫様天晴なるお志、其お
 心見るからは、勝頼様に達はせませう、ソ
 レ、そこにござる糞作様が、御推量に違は
 ず、あれが誠の勝頼様、ちやつとおあひな
 されませと、突やられてはさすむにも、始

いふは、
 勝頼様
 御推量に違はず、
 あれが誠の勝頼様、
 ちやつとおあひな
 されませと、
 突やられてはさすむにも、
 始

の恨み百分一、聞えませぬが精一ばい、後は互に抱付き、つい濡初に、濡衣も、心ごきつく折柄に、父謙信の聲さして、詞義作は何れに居る。搦尻への返答、時刻移るに立出れば、はつと義作飛しさり、詞御支度よくば直様参上。ホ、委細の事は此の文箱に、片事も早く罷越せ、はつと領掌文箱携へ、搦尻さして急ぎ行く。謙信後を見送つて、詞ヤア／＼者共、用意よくば早來れと、仰せにはつと白須賀六郎、原小文治、更科なんどの譜代の郎黨、御前にすゝめば謙信勇んで、詞今此諏訪の湖に、水閉れば波海は叶はず、搦尻迄は陸路の切所、油断して不覺を取るな、ハア畏り奉るこ、勇み進んでかけりゆく。

後に不審は八重垣姫、申し父上、こそん／＼しい今の有様、何事やらんと尋れば、詞ホ、あれこそは、武田勝頼討手の人數、何に

勝頼様を討手とは、コハそもいかに何故か驚く二人をはつたと睨め付、詞諏訪法性の兜を、盗み出さんうぬらが巧み、物かけにて聞いたる故、勝頼に使者を云付け、歸りを待つて討取さんと、牒合はせる討手の手配、エイそんなら今の討手の者は、勝頼様を殺さん爲か、ハアはつとばかりにどうさ伏し今日は何なる事なれば、過ぎ去り給ひし我夫に再び逢ふは優曇華と、悦んで居たものを、又も別れになる事は、何の因果ぞ情けなや、父のお慈悲にお命を、どうぞ助け給はれと、口説き歎くに目もやらず、詞ヤア武田方の廻し者、憎き女ご濡衣引たてうぬには尋れる仔細あり、奥へ失せうと小腕ざり、情用捨もあら氣の大將、帳臺深く入り給ふ。思ひにや、焦れてもゆる、野邊の狐火小夜ふけて、狐火や、狐火野邊の野邊の、狐火さよふけて、幾重もれくる爪音

大坂市南區大津門外一丁目番四番

商號 **屋津今** 登記

大坂市南區大津門外一丁目番四番

は、君をもうけの奥御殿、こなたは正体涙
 なから、詞アレ／＼奥の間で檢校も、諷ふ
 唱歌も今身の上、おいこしいは勝頼様、か
 いる巧みのあるぞとも、知らずばかりぬ御
 身の上、別れとなるもつれない父上、諫め
 ても、歎いても、聞入れもなき胸怒人、娘
 不惑と思はすなら、お命助けて添はせてた
 べと、身を打伏して歎きしが、詞イヤ／＼
 泣いてあられぬ所、追手の者より先へ廻り
 勝頼様に此事を、お知らせ申すも近道の、
 諏訪の湖船人に渡り頼まん急かんぞ、小
 袂取手も甲斐／＼しく、かけ出せしが、イ
 ヤ／＼、詞今湖に氷張詰め、船の往
 來も叶はぬよし、歩路をいては女の足、な
 んぞ追手に追つかれう、知らすにも知らさ
 れず、みす／＼夫を見殺しにするは、いか
 なる身の因果、詞ア、翅かほしい、羽かほ
 しい、さんで行きたい知らせたい、逢いた

い見たいと夫戀ひの、千々に亂るゝ憂き思
 ひ、千年百年泣きあかし、涙に命絶ゆれば
 きて、夫の爲にはよもなるまじ、此上頼む
 は神佛と、床に祭りし法性の兜の前に手を
 つかへ、詞此御兜は諏訪大明神より武田家
 へ、授け給はる御宝なれば、取も直さず諏
 訪の御神、勝頼様の今の御難儀、助け給へ
 すくひ給へと、兜を取て押頂き、押頂きし
 佛の、もしや人の咎んぞ窺ひ下りる飛
 石傳ひ、庭の溜の泉水に、うつる月影怪し
 き姿、はつと驚き飛退しが、詞今のは慥に
 狐の姿、此泉水に寫りしは、ハテめんよう
 なごぎつく胸を撫でおろし／＼、こば
 ／＼ながらそろ／＼と、さしのぞく池水に
 寫るは己が影ばかり、詞たつた今此水に、
 寫つた影は狐の姿、今又見れば我が佛、
 幻と云ふ物か、但し迷ひの空目とやらか
 ハテ、怪しやとつおいつ、兜をそつ手に

各間種扇 戸田商店

大阪南區道堀下大和橋
 電話六九二番



捧げ、覗けば又も白狐の形、水にありく
 有明月、不思議に胸もにこり江の池の汀に
 すつくりと、詠め入つて立ちたりしが、詞
 誠や當國諏訪明神は、狐をもつてつかはし
 めと聞つるが、明神の神体に等しき兜なれ
 ば、八百八狐つき添ひて、守護する奇瑞に
 疑なし、合オ、それよ思ひ出したり、湖
 に氷張詰むれば、渡り初する神の狐、其足
 跡を知邊にて、心安う行きこう人場、狐渡
 らぬ其先に渡れば、水に溺るこば、人も知
 つたる諏訪の湖たさへ狐は渡らずとも、
 夫を思ふ念力に神の力の加はる兜、勝頼様
 に返へせとある、諏訪明神の御教へ、ハア
 一忝や難有やと、兜を取つて頭にかつけ
 ば、合忽ち姿狐火のこゝにも燃へ立ち合
 しこにも合亂るゝ姿は法性の、兜を守護す
 る不思議の有様、こなたの間には手弱女御
 前、始終の様子窺ふ共、いざしら菊の花の

番、小屋にこつくと關兵衛が、つけまばし
 ても神通力、花のまにく見えつ隠れつ神
 さる狐、南無三寶とせき立つ關兵衛、ねら
 ひの的は手弱女御前、どつきりひやく鐵砲
 の、音を相圖に遠近より、俄に響く鐘太鼓
 亂調に打ち立れば、騒がぬ關兵衛廣庭に仁
 王立、ほどなく馳來る雜兵輩、我討取らん
 さひしめいたり、詞ヤアしほらしき有財餓
 鬼、此世の暇さらさんさ、だんびらするり
 と抜放し、あたる任せになぎ立てく御殿
 をさして三重門追て行く。

お料理は斯界の王座

つる家本店

今橋五丁目 電話本局 } 三三三 一五二 六二



沼津里の段

豊竹古鞆太夫
鶴澤清六
ツ
豊澤猿太郎
レ
鶴澤友衛門

平作内の段

竹本津太夫
鶴澤
豊澤新之助
胡弓
豊澤勝之助
鶴澤小綱

人形

親平作
吳服屋重兵衛
娘およね
荷持安兵衛
池添孫八
吉田玉次郎
吉田榮三
吉田文五郎
桐竹紋太郎
吉田玉七

中
伊賀越道中双六

沼津里の段

この淨瑠璃は天明四年二月竹本座へ近松半二、近松加作の合作で書下されたもので、安永七年近松東南作の『乗掛合羽』を補綴したと傳へられてゐます。この沼津の段は全曲の六段目になつてゐましてこの敵討のありましたのは寛永十一年十一月七日處は伊賀上野の鍵屋の辻にあつた事實で日本三大敵討の一で時の幕府も手古摺つたといふ旗本と大名の對峙であつたものだそうです。序本に出て来る澤井股五郎は河合又五郎、和田志津馬は渡邊數馬、唐木政右衛門は荒木又右衛門でおよれの瀬川は只

筋合の都合で取り入れた人物で享保三年頃京都生れの大森たかこいふ女も吉原へ来て瀬川と名乗つたおまの敵を討つたといふ事蹟をこゝへ持つて來た作者の寓意であります。志津馬の父渡邊鞆負を殺した澤井又五郎を討つべく志津馬は唐木政右衛門の助太刀を得て其行方を探しまはつてゐた。平作はおまの親で沼津在で雲助をしてゐた。志津馬はこのおまの瀬川と吉原で敵を探れてゐる中に馴染んだお志津馬の破傷風を癒さんとおまは日夜心を痛めてゐましたお圖らず平作がつれて戻つた旅の客重兵衛は實は平作の實の子でおまの兄に當り幼い時に子にやられたもので今は股五郎方のものであつたが印籠からそれぞ知つたが親子の名乗もあへず

苦しい別れをして立ち行きますが、後追かけた平作の實の親父も今生の頼みを入れて腹を切つて落ゆく平作に引導替りに股五郎の在所をきかせますの有名な詞章の『落付く先は九州相良、道中筋は參州の、吉田で逢ふたま人の噂さ』であります。

沼津里の段

M 東路も爰も 三下りうたな高き
沼津の里、富士見白酒名物を、一つ召せ召せ駕籠に召せ、おかごやるかい参らうか、おかごおかご稻叢の蔭に菓を張り待ちかける蜘蛛のならひご知られたり。浮世渡りは様様に草の種がや人目には、荷物もしやんと共廻り、泊りを急ぐ二人連れ、立場さ見かけ立止り詞コレハしたり大

事の用をさんご忘れた、大儀ながら私が寄つた所まで、一走往て来てたもご、急ぎの用事走り書、さらさらご書認め、早うご手に渡せば、主に劣らぬ達者もの、心安兵衛逸散に、元來し道へ引きかへす。稻叢の蔭より 旦那申、お泊りまで参りませうかい、申旦那様、何卒持して下さりませ、今朝から一文も銭の顔を見ませぬ、どうぞお慈悲。さひかけられ 詞 イヤ〜わしは今夜は夜越に行く、サそこお慈悲で御座ります。ご頼みかけられ是非も無く 詞 サそんなら吉原まで何ぼぢや。エ、おまへ様も、私が頼んで持つぢやもの、えい程に下さりませ。サそんならやらしやれ、年寄のよしにせいでのもんなら持たして下さりませか

チエ 忝ないサアお出でなされませ。ヤツト任せば聲ばかり、一肩往いてば立留り 詞 アノけふは結構な天氣ぢやな、ヤツトまかせ二肩往いては息を繼ぎ 旦那申、向ふの立場に鱧の名物が御座ります、ヤツトまかせ 岡崎杖する度に追従口合 深田に下りし白鷺の、餌びみをするに異ならず、見るに氣の毒 親仁殿ちつと持つてやりませうかア、それ〜
〜危ない〜、イエ〜勿体ない勿体ない。ア、氣の毒な足元、最前から見て居るに、氣しんどでならぬ。これはわしが足の癖でござります。旦那のお蔭で、けふも内入がようござります。モウこなたもいくつぢや。七十に手が届いてござります。ア、ソレ〜合點の行かぬ足取。

お氣づかひなされまますな、若い時は
 小相模の一番もさりました。ヤツト
 まかせまなア、さいふ下道の爪先上
 り、氣の根につまづきひよるひよる
 く詞ソレ見やしやれエ、きつい事
 をしたの、親指を蹴かいたかヨシ
 く早速に直してやる。さ用意の薬
 取出し、付けるさ其儘、詞何さごう
 ぢや、痛みは止るが、コレハ結構な
 お薬でござります、痛みはこんと直
 りました。サアく御出でなされま
 せ。イヤコレく荷はおれが持つて
 やる。ア、旦那様滅相な。イヤサ駄
 賃はやる、氣遣ひさしやんな、こな
 たの足元、最善から危なうて危なう
 て荷を持つ方がやつと氣楽な咄し、
 もつて行きませう、サアくござれ
 と先に立つ 三下り 平作は千鳥足合し

んごち利になる蒟蒻の、砂に成るか
 と悲しさに、小腰かゝめて、旦那様
 一肩やりませうかい。イヤく是で
 大分歩きよい、マ、こなたの足元茶
 めいた物ぢやの、その足取りを狂言
 師に見せたいわいの、亂れなご言
 ふて、傳授事に成りそうな事。イヤ
 旦那のおつしやる通り、大樞亂れか
 くつて居りますわい、ハイハイと
 道の伽する笑ひ艸、踏み分けて來る
 道草に、菊の折草持ち添へて、見合
 はす顔はこゝ様か 詞 およれぢや無い
 か、けふは結構な旦那の供したので
 荷は持たずにお世話になつた。御禮
 申してたも。コレハく有がたい、
 もう爰がわたしが内、暫くお休み遊
 ばせよ、昔の残り風俗も、お羽打枯
 れし松蔭に、伴ひ入るや西日影。わ

びたる中に二人住、門の柱に記しの
 笠、おかけなさるりや庭一杯いっそ
 座敷へマアお上りよ、親仁が馳走娘
 の愛、前垂の藍薄くとも、マアお茶
 ひとつさ差出す、こぼれかゝつた藁屋
 葺、折悪う湯もわかず、水でなりお
 みあしな 詞 ア、イヤくもう行きま
 する、扱娘御はよい器量、不躰なが
 ら此内には、せ、なげに咲いた杜若
 よい床へ生けたいのう。ハイごなた
 も左様におつしやります、自慢で作
 つて置きましたれど、近頃は手入れ
 が悪さに、いこふ田地も荒れました
 何か身に構はず、賃仕事、貧乏は苦
 にもせず、それにそれは孝行にして
 くれます、それで私か年寄つての蜘蛛
 助も、せめて三文なご肩休めよ、
 餘りあれがいちらしさで御座ります

コレも、様初めてのお方に、其様な
さもしい咄を。ホンにさうぢや、ハ
ィ、イヤおよね、けふは大きな怪我
をしてな、コレくく是見よ、爪
が起きてある、ア、薬もあれば有る
ものぢや、あなた様の薬きつい妙薬
ありや何ぞ申す薬で御座りますへ。
此薬は大切な物、第一金瘡では此
場で治る妙薬、武家方には尋ねれど
も、金銀づくでは手に入らぬ妙薬、
ぞ語れば娘は猶ほたく、詞ご、様の
命の親、一日や二日で御禮は云ひも
盡されず、ならう事なら今宵は爰に
逗留遊ばして詞マ、娘何云ふぞい、
こんな内に泊まして、看ば千翻が一
匹無し、虱より外あなたの方に付物
は無い。イヤく不自由は仕付て居
ます、娘御ああの様に、しなつこら

しういばしやるので、ごうやら爰に
根が生へた、大事なくばいつそ泊め
て貰ふかいご目の鞘抜けし商人も、
上手な娘のもてなしに、ころりとな
ればお枕さ、油氣は無い真味の馳走
これも一樹の笠舎り、尋れる軒の目
印當に内に入り詞旦那是にござりま
すか、サお立ちなされませんか。ホ
、安兵衛か、早かつたく、そなた
は其荷物を持って吉原の鍵屋で宿を取
りや、日和が知れぬ早う行きや、雨
具の用意は吉原の、鍵屋をさして急
ぎ行く。跡見送つて十兵衛は詞コレ
親仁殿此娘御より外にもう子供衆は
無いかこの。ハイ此およねの上に、
男の子が一人あつたれど、二つの子
養子にやりましたが又其の親の手を
離れ今は鎌倉の屋敷方へお出入、よ

い商人になつ居るてこの噂、それ聞
いてごんご思ひ切りました。ソリヤ
又何故に。ハテ一旦人にやつたれば
捨たも同然我子乍らも義理あるもの
今其悴か身上がよいきて、尋ねて行
て箸かたし貰うては、人間の道が濟
みませぬ、今出合ふてもあかの他人
子ご云ふは此娘一人。ム、それも尤
も、其兄貴は今いくつ位ぢやの。ハ
イかうつ、恰度今年二十八、鎌倉八
幡宮の氏地の生れ、母の名は豊と書
付け、守袋に入れてやりました、
その後このおよねを生んでかゝも相
果て、即ちけふか命日で、孝行娘か
水手向け、花の立て方ごろちやいて
下さいませと、何心無き咄の合致、
一々胸にこたゆる十兵衛、思ひ合は
せば覺えあり。扱は産の親父様、血

を分けた我妹が貧苦の有様、有合はせた路用の金、なま仲親子の名乗つては、受けぬ氣質を何まかな、金のやりたい屈託に、胸を痛めて詞コレ親仁殿、何んも物は相談ぢやが、此娘をわしに下されぬか。エ、奉公にあげますのか。イヤテヤ未だ女房のない男、利發な娘御、商人の婢に極上々の羽二重地、得心して下さるなら、仕こしらへばこつちから、旅商人のこまなれば、よびむかへる日限は、まゐいつとも定められぬ、嫁入りのこしらへ料、爰に少々持あはず、是をおいて行きます、得心かいの、どうでござんす、コレ女房面目無いか最前から、わしやこなきんに惚れたわいのこ、しな付きかければついで退き詞、様あの方もう

いなしで下さんせ、いかに貧しう暮して居るさて、あたまめすぎた阿呆らしいこ、打つてかばりし腹立顔エ、たしなめ、よい女房と言はれるが、何のそれ程腹が立つ事、我が器量がよい故ぢやと、おりやうれしいイヤ申あなな様、よう御親切に惚れさしやつて下さりました、ぢやがこれのおよれば、女房といふては、やらぬ譯がござります。ム、そんなら御亭主があるのか、これは、イヤ實は只今のぼほんの座興、主のある人共存せず、齋相申した、眞平御免にあづかりませう、コレ娘御、機嫌直して貰ひましょアノ痛み入つたお詞、ほんに思へば在所者を、おなぶりなさるを眞受にして、お恥しやまにつこりこ、笑ひに心打解けて、

咄に紛れてすつぶりこ、日の暮れてあるに氣がつかなんだ詞、三日月様か上つてござる、宵月夜で行燈は入らぬ、その明を伽にして、辻堂の雨舎り、お客様もうお休み、足延すこ壁につかへる奥座敷、ゆるりこちやまつて、御寢なりませ、わたくしは此臺所、コリヤ娘はそちらに寝い、旦那様はお小さいけれど、時のぼづみでは、主のある池へふんごみなさりよも知れぬ。用心には綱を張れぢや今夜はおれが股引はいて寝や、寒けれどあなたには、わしとござんざを福になご、追風もて来る鐘の聲、いとしん／＼と聞へける。およれば一人物思ひ、心にかゝる夫の病氣、我手で介抱する事も、浮世の義理に隔てられ、秋の螢の消え残る、佛壇の灯

も細々ミ、嵐にふつと氣のつく娘詞
奇妙に治つたまゝ様のあの疵、今で
も敵の手掛りが知れてから、あの病
氣では思ひもよらず、ムゝと心で黙
頭き胸を据へ、灯の消へたるは天の
與へ夫の爲さ拔足差足探り寄り、印
籠取り上げ立退く足、躑く音に目覺
ます十兵衛、思はず高聲、何者ミ、
裾を捕へて引きこむれば、わつと泣
き入る娘の聲平作も恟りし、起上つ
ても眞暗かり、およれく云ひつ
くさかす籠の埋火、附木にうつし顔
見合はせ、娘ちや無いか。旦那様か
。何故に此有様。エ、何の因果で此
様な情無い氣になつたぞいやい、コ
リヤ此親は其日暮しの者ぢやけれご
な、人様の物もじきな盗も云ふ
氣は出さぬわいやい。エ、親の顔迄

穢し居つたまゝ、わつと斗りに泣き居
たる。十兵衛は氣の毒顔詞金錢を取
つたミ云ふでは無し、是には譯の有
りさうな事ミ、問はれておよれば顔
を上げ詞恥かし乍ら聞いて下さりよ
せ、様子有つて云ひ交はせし、夫の
名は申されぬが、私故に騒動起り、
其場へ立合ひ手紙を貰ひ、一旦本腹
有つたれど、此頃は頻りに痛み、色
々介抱盡せども効無く、立寄る方も
旅の空、此近所で御養生、長しい間
に路銀も盡き、其責に身の廻り、
籬笄まで賣拂ひ、悲しい金の才覺
も、男の病ひが治したさ、先程のお
咄しに、金銀づくでは無いとの噂
燈火の消えしより、あの妙薬をどう
かなと、思ひ盡しが身の因果、ごっ
ぞお慈悲に是申、今宵の事は此場切

お年寄られしお前に迄、苦勞をかけ
し不孝の罪、けふは死なうか翌の夜
は、我身の瀬川に身を投げんミ、思
ひし事は幾度か、死んだあこでもお
前の歎きさ一日ぐらしに目を送る、
どうぞ御慈悲に御了簡ミ、東育ちの
張もぬけ、戀の意氣地に身を砕く、
心ぞ思ひやられたり。歎きのはし
くつくく聞き取る十兵衛詞ッ
レ姉御、そんならこなさんは江戸の
吉原で、全盛の松葉屋の瀬川殿ぢや
の。ハイテモよう御存知。スリヤ瀬
川殿の夫の爲にムウムウと心の目算
思案を極め詞イヤコレ太夫殿、夫の
手疵を治す藥慾しいは尤、それ聞い
て進ぜたいものなれど、是は人の預
り物此事は思ひ切らつしやれ、今こ
なた衆の咄しの通り、わしも亦た恩

を受けた、サ、其恩を請けた人の爲に、い
 づれの寺へも苦しくないが、石塔一つ寄進
 がしたいが、何と世話して下さるまいか。
 夫は御奇特結構な寄進でござります、何時
 成り共御世話致しませう、私も來年は嫌ひ
 年忌、勤むる功德俱に成佛みやら、是非お
 世話致しまするで御座ります。ごうぞ今度
 の下り迄、違はぬ様に頼みます。豫ての願
 ひに書付も、此内に委しうござるご、金一
 包取出し詞コレ必らず頼んだぞや親子の衆
 最早夜明けに間となし、随分無事に親仁殿
 と、立出れば平作も、必らず御下り待ちま
 する。姉御さらばさばかりにて、心に一物
 荷物ば先へ、道を早めて急ぎ行く。跡に親
 子は顔見合はせ金取上げてコレおよね、詞

随分大事に掛けておきや、夜明迄は間もあ
 る、其方も休みやみ水入らず、見廻はず傍
 に落ちたる印籠詞ア、是は今の旦那のぢや
 定めて尋ねてござるで有るご、云ふにおよ
 れが手に取つて、此印籠は何うやら覺えの
 ある模様、ハテ合點の行かぬ、それが是か
 ミ能々詠め詞本にそれよ、是やコレ澤井殿
 五郎が常々持ちし覺えの印籠、ハテ不思議
 なご平作も、金取出しよく見れば詞金子參
 拾兩、此書附は鎌倉八幡宮の氏地の生れ、
 稚名は平三郎母の名はお豊、コリヤコレ我
 子に付けて置いた書付。そんなら今のお方
 ば、私も爲には兄様。オ、我が子の平三で
 有つたかい、
 そんなら最前からの深切は、夫さば言はず

町水清東區南市阪大
 番九三三八南話電

義 太 夫
 肩 衣 袴
 附 一 品 式

野村青雲堂



此金を、買いでくれた石塔代、不思議な縁
と親子は、暫し呆れて居たりしが、およ
れば印籠手に取つて、裾はせ折つて駈け出
す詞コリヤ待て娘、コリヤごへ。ごへへ
とはさうさん、此印籠を持つてゐる、その
兄様は敵の手まゝり、追掛けて股五郎が、
在家を尋ね志津馬様へ。尤ぢや尤ぢや、
われでは往かぬ、年寄つたれど此平作、理
を非に枉げて言はして見せう、吾も續いて
後から来い、ごの様な事があつてもな、必
らず出なよ、敵の在家聞く迄は大事の場所
木陰に忍んで立聞きせい、必らずさも慮忽
すな合點か、本海道は廻り道、三枚橋の濱
傳ひ、勝手覚えし拔道なを、子故に迷ふ三
悪道、轉げつ倒びつ走り行く。跡にはおよ
れ身ごしらへ、續いて出でんとする所へ、

折から來かゝる池添孫八 詞瀬川様か、孫八
殿好い所へござんした。今夜爰に泊つた客
で、敵の手筋が知れさうな、詮議の爲に吉
原まで、さうさんが行かしてやんした。エイ
忝ない、シテ其行先は、吉原までばよも
行くまい、何かの様子は道にて聞かんぞ、
瀬川に續く池添も、足に委せて三重幕ひ行
く。實に人心様々に、町人なれ共十兵衛は
武士も及ばぬ丈夫の魂、夜深に立ちし獨旅
千本松にさしかゝる。オオイ〜さ杖を力
に息すた〜 詞申々旦那様、ヤレ〜お早
い足元。ムウ今呼んだはこなたか、あはた
いしく何の用、イヤ只今のお金を、お戻し
に参じました。石塔料ご名をつけて、大枚
の金子参拾兩、其の日暮しの蜘蛛助に、下

本日映齋の統帥権を握る
松竹キヌマの新版封切場

ごうばんり

朝 日 座

さるも譯がある、又た請けまするにも譯がある、雖然此金を請けましては、去る人が立たぬ義理がござります、是をお返し申します代りに、あなたにお頼みも御座りますお聞きなされて下さりますか。ムハテ一夜さ泊るも何んその約束、様子に寄つて頼まれまい物でも無い。夕闇月夜の聲知るべ跡より窺ふ池添瀬川、肩唾を呑んで聞き居たる詞シテ其頼みの様子は。ハイ被仰つて下さりませ、此印籠の主の在家を、承ばりたう御座ります。これを尋れて知りたいたかりに、様々の流浪致す人、夫故娘も廓を出て憂き艱難、是も知れると本望成就、娘につれて私までも、モ、此上の悦びは御座りませぬ、貳拾や參拾の端た錢で、露

命を繋ぐ私、死ぬる迄安樂に、暮される程の參拾兩、其金銀にかへてのお願ひ、七十に成つて蜘蛛助が、魂に叶はぬ重荷を持ち、夫は未だ休みもする、子の可愛こいふ重荷は、寢た間も休まぬ一生の、苦痛を助ける藥の名、お前様に親御あらば、子故には愚痴に成る物ぢやと思召しやられて、願ひを叶へて下さりませ、コレ申旦那樣。ご血筋ご義理ご道分石、分けて血の緒の三界に、踏み迷ふこそ道理なれ。親の心を察しやり詞ム、さう有らう。心底至極尤ぢやが、是ばかりは何うも言はれぬ、おれも頼まれた男づく、其方の人が大切なら、此方にも亦大切、譬へ又た在家を聞いても命がなくては本望が遂げられまい、ソレそ

場樂娘の一阪大

地 天 樂 前日千

の信義橋高・子信月五

演 公 座 代 近

樂娘の館モドコ
畫映の館マネキ

ちの内に落して置いた、主し無い印籠の其妙薬で、疵養生達者になつた其上では、望みの叶ふ時節もあらう。親仁殿、サ左様ぢや無いかと、心の替匣、一重明けぬ十兵衛が情の詞、詞サ、夫程お慈悲のあるお方、逆もの事なら其薬の持主、イヤサコレ悪い合點、此薬の持主は、其病人さば大敵薬、参拾兩の其金、敵の恩を請けまいため、戻したでは無いかの、此持主の名を言へば、敵の薬で疵本復、恩を受けては眞逆の時、切先むなまらうぞや、猶且拾ふた薬にして、心置きなう養生さしたか、よささうに思はるゝと、聞いて平作感じ入り詞ア、さうぢやあつた、エ、御前様は恐ろしい發明なお人ぢやの、左様聞きましては、申様もござ

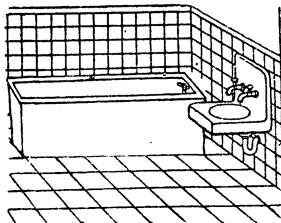
りませぬ、左様なら歸りましよ、旦那様おさらばと云ひつゝ、探つて十兵衛が、脇差抜きさり腹へぐつと突立る詞ヤア、何んとした何んとした、コリヤ自害か、何故に誰を恨んで、勿体なやさうろく、涙驚く娘を、手に手當る池添が、鳴音止むる響虫草、に食付泣く斗り。平作苦しき目を開き詞、おりや此方の手に掛つて死るのぢやわいの、ハテ、此方さ巳さば敵同士、志津馬殿の縁のある、此親仁を殺したれば、頼まれた此方の男は立つ、コレ、此上の情には、平作も未來の土産に、敵の在家を聞かして下されいの、外に聞く者は誰も無い、今死ぬる者に遠慮はあるまい、不思議に始めて逢ふた人、何うした縁やら我子の様に思ふ者

化粧タイル

水道衛生工事

洗面、浴場、

水洗便所設計



西區立賣堀北通一丁目
新一橋

岡部商會

電話 一六六九
一一二七六

何んのこなたに引け取らす様なここの親が、サア此親仁も致しませうぞ、是が一生の別れ、一生の頼み、聞かずに死んで、迷ひますわいのくコレ、拜みますく且那樣と、子故の闇も二道に、分けて命を塵芥、須彌大海にも勝つたる、誠の親に初めて逢ひ、名乗もならぬ浮世の義理、孝行の仕納め 詞どに誰か聞いて居まいものでも無けれど、十兵衛が口から云ふは、死んで行く此方さんへの饒別、今端の耳によう聞かつしやれ、股五郎が落付く先は九州相良道中筋は參州の、吉田で逢ふたご人の噂
 エー忝ないくく、アレ聞いたか、イヤ誰も無い誰も無い、聞いたは此の親仁一人夫で成佛しますわいのく、名僧智識の引

導より、前生の我子に介抱請け、思ひ残す事は無い 詞早く苦痛を留めて下され、親子一生の逢ひ初めて逢ひ納め、親仁様、平三郎でござりますく。チ、兄かい、エ、顔が見たいくく顔も見たいはいやい。チ、御尤でござりますく親父様。モウ御臨終でござりますぞへ、御念佛を申されませ
 チ、南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛くく
 さ唱ふる十年十兵衛か、こたへかれたる悲歎の涙 始終うかふ池添む、小石拾ふて白刀の金、合はす火影は親子の名残り、跡に見捨て 三重 M 別れ行く。

御期待の映畫の見易い
 松竹の姉妹館
座 天 辨

歐米映畫の粹と
 はやなかの實演



道行戀の小田卷

おみわ
求女
橋姫
(毎日毎段)

豊竹 和泉大夫
豊竹 相生大夫
豊竹 島大夫
豊竹 富大夫
豊竹 綾大夫
豊竹 浪花大夫
豊竹 辰太夫
豊竹 千駒太夫
豊竹 陸路太夫
豊竹 播路太夫
豊竹 仙系
豊竹 猿系
豊竹 園系
豊竹 歌助
豊竹 芳助

切
妹脊山婦女庭訓

道弓戀の川庄巻

この道行は妹脊山の四段目奥の次で書下しは明和八年正月で近松半二、三好松洛等の作の一つで、初演の時は春大夫、禊大夫、和大夫等が語つてゐます。この段の様様を申上げます。求女の風雅な姿に戀ひ焦れて入鹿の娘、橘姫と杉河屋の娘お三輪がその後を追ひます、二人して思ふ男を争ひます。求女は腹に一物あり橘姫の裾に緒環の糸をつけ、お三輪はまた求女に緒環の糸を結びますその戀の緒環をたぐりく行きついたのは一代の榮華を極めた入鹿大臣の三笠山の御殿であります。橘姫

と淡海が祝言の手拍手が奥から聞えるのでお三輪は氣も狂はん許り、鱧七はお三輪を凝著の相ある女と見てさつてたゞ一突きに刺します。お三輪はその生血が戀人の役に立つと聞いて満足に死んでゆくさいふ筋合で御座ゐます。

道行戀の小ト巻 (床本)

M 常闇の夜々毎に通ひてはまた歸るさの道もせきもせそれも何故戀故にやつるゝ所體はづかしと佛隠す薄衣についぬと薫り橘姫、思はぬ人を思ひ託心のたけをくごれどもつれなき松の下紅葉こがれてたへんたまのをも殿故ならば捨草も暫しはいかふ芝村の賤の男も置手拭で忍び忍びの出あいづま晩にござらばナコンのんやほんにさ脊戸の柿の木枝こ

人形

お 橋 求
 三
 輪 姫 女
 吉 桐 吉
 田 竹 田
 文 紋 文
 五 十 五
 郎 郎 郎
 三 榮 三

野野鶴 鶴鶴 鶴豊豊 野鶴鶴
 澤澤澤 澤澤 澤澤澤 澤澤澤
 吉喜友 叶寛 友猿廣 八友友
 代之 太 二太 之
 左助 郎市 若郎郎 助造助

へて連理を契る言の葉はそれも戀中
 爰はまた箸中村よ一もつの長者が後
 名にひやく釜口をも出放れてあ
 ゆむにくらきくれ竹のしげれる中を
 分行ば葉毎の露もほろ／＼さほろ、
 打なる雉子の聲思ひくらべていさ
 猶心細野に立つくすにくやかましに
 おびさるゝわれが姿にまたおぢてはつ
 こ立行羽風につれてちり／＼ちるや
 柳本流るゝ水に裾ぬれて物思へこや
 帯さけの里 羨し自はついに一度
 の情さへないて身をしる涙雨ふるの
 社の御燈の影か松の木の間ちうち
 ちさ見へつ隠れつ歸るさの後を求女
 がしたひ来て互にはたさ行合の星の
 光りに顔と顔ヤア戀人が何故に爰迄
 後を追鳥ばもしや塘の契りをも叶へ
 てやるこのお心か胸にはいへど詞

には面はゆぶりの袖几帳なるほごせ
 つなる心ざし仇に思はじさりながら
 さほごこがるゝ戀路にて晝をば何さ
 うげ玉の夜斗りなる通ひ路はいさふ
 しんなり名所を聞いたる上はこなた
 まり二世のかためは願ふ事明させ賜
 へさひたすらに問はれて實にも恥か
 しのもつて餘れる爰身の上語るにつ
 らき葛城の嶺の白雲有ぞともさだか
 ならざる賤の女と思ふて深い疑ひの
 雲を晴して自ら思ひも晴らして賜は
 らばごんな仰も脊くまいたさへ草葉
 の露霜と消ても何のいさやせぬこれ
 程思ふに胴慾なさけぬお前のお心は
 餘りむすぶの神様を祈り過したさか
 めかやつれなの君やご恨詫思ひ亂る
 薄かけそれさお三輪は走り寄り中
 を隔てゝ立柳立退く秋引さやめエ

聞へませぬ求女様ソリヤ氣の多い悪性なそ
 もや二人が馴れ初めは始めて三輪の過し夜
 に葉ごしの月の俤はお公家様やら侍様や
 らしれぬ形ふりすつきりさ水際の立よい男
 外の女は禁制さしめてかためし肌さ肌主あ
 る人をば大膽な断りなしに惚るさばごんな
 本にもありやせまい女庭訓驥方よふ見やし
 やんせエ嗜なされ女中様イヤそもじ逆たか
 ちれのゆるせし中でもないから戀は仕か
 ちよ我殿様イヤわたしがイヤわしがこゝ
 のに縋りつ手を取て團に色よく咲草時は男
 女になぞらへいは言はれふ物か夕顔の梅
 はものゝふ櫻は公家よ山吹は傾城杜若は女
 房よいろは似たりや菖蒲はめかけ牡丹は奥
 方よ桐は御主殿姫百合は娘ざかりさなでし
 このサアなるぞへくなるさならずさなら
 坂や兎手柏の二人の女にらめげにらむ萩さ
 萩中にもたるゝ男べし放ちはやらじさ縋り

付こなたむ引ばあなたがおまめ戀の桐萬
 葛付まごばれてくるくく廻るや三つの
 小車の花よりしらむ横雲のたなびき渡りあ
 りく三笠の山も程近く鳴鐘の音におご
 るく姫歸る所ばいつくぞも求馬が氣轉振袖
 の端にぬふてふ取りかはす縁のおた巻いさ
 しさの餘つて三輪も倍氣の針男の裾に付る
 共しらすしるしの糸筋をしたひしたふて



座王のユヴレとマネシ
 備完の置装風冷さ氣換

座竹松 堀頓道

四ツ橋畔より

— 消息 日誌 —

△五月三日

五月興行の初日あく。

この月は四代目南部、三代日長尾、四代目重造の襲名興行あり。

△五月一日

五月興行開場前の準備日でありました。米國雜誌記者の一行も来られたので松竹福井常務の説明で紋十郎が、結姿で舞臺そのまゝに三番叟の人形を遣ひ、重造も糸をつさめた。靜の人形については特に注目をひき光秀、忠信、なごの人形を克明に見て、舞臺から人形部屋、太夫部屋など一わたり見學して歸つた。一行はリンドセイ團長以下十八名の男女

△五月六日

から成るアメリカ雜誌記者團の觀光團です。

新米國大使キヤツスル氏以下十名來觀。福井常務の案内で特別席で折柄開演中の津太夫の日向嶋、並びに土佐大夫の重の井を見物の上舞臺を見學して記念撮影をした。

△五月七日

駐佛大使としてフランスへ赴かる、芳澤謙吉閣下が住友總務の川田順氏と同伴で來觀特別室で休憩の後紋十郎が重の井を操り福井常務も説明を附し人形と共に記念撮影をした。

△五月十三日

電気協會第九回總會出席者招待會場となり懇親會開かる。全國の電業界權威と業界の巨頭連を網羅して全員千六百名。主なる出席者、小泉遞相代理として富保電

皆おぼへに つなひ役捕のひ 東 西 合 同 大 歌 舞 伎

伽羅先代萩

御殿より
双備まで

鏡 獅子

長唄獅子連中

いろは新助

二番

大森彦七

竹本連中

常發連中

罷越路東颯

常發連中

天 下 祭

長唄連中

東 京 歸 りの
中村鷹治郎

東 京 より
市川中車

松本幸四郎

ほか大一座

毎 日 午 後 一 時 半 開 幕

座

中

ごん

うぼ

さり

なご一わたり見學して歸つた。
一行は、ロンドンでセインツ堂を見下十八名の男女

氣局長、林師團長等のお顔も見えてゐました。
屋上休憩所で富保局長、津太夫、松竹福井常務等で記念撮影をせられました

△五月十四日

長野縣諏訪第二高等女學校生徒八十名、職員五名に引率されて態々土佐太夫の『重の井』を見學に來られた當座からは記念書文、澤今昔譚等を贈つて遠來の觀覽に應へた。

△五月十六日

内務省貿易課長は屬官二名と京都大阪の衛生課長を隨へて來觀された。

△五月十七日

中央公會堂に於ける大阪市教育會定期總會の慰安に交樂座淨瑠璃として豊竹つげめ太夫野澤勝市も招聘され『靈坂寺』一段を上演した教育家連に感動を與へたこと深かつた。

△五月十八日

界の巨頭連を網羅して全員千六百名。主なる出席者、水原源相代理として富保局長

京都帝大創立記念祭に新城總長の幹旋三澤學生課主事の主唱に依つて交樂座人形淨瑠璃も始めて大學の講堂に上つた。狂言は義經千本櫻の道行『初音の旅路』で主なる出演者は

嶋太夫、鏡太夫、源路太夫、辰太夫、隅榮太夫、團六、友之助、綱右衛門、友衛門、團二郎、人形は紋十郎、玉松其他。當日文五郎も顔を出して指導に努めた。

△五月十九日

大阪女子専門學校長平林治徳氏の案内役で帝展審査員東京美術學校教授小林萬吾氏が東京より來觀さる。特別室で澤瀝姫ご三番叟の人形に就て説明をき、満足の意を表された。

△五月二十日

兒玉朝鮮政務總監、澤子夫人同伴にて今

座花浪の月六

園劇銳新の一唯だん生が阪大

演公場劇一第

入加の優女氣人に新更容内

幕開時四後午日毎

幕開半
座

津博士の案内で大阪ホテルより來觀する
非常に御意に適ひ貴賓室に於て重の井の
人形に就て紋十郎も操り説明をきかれい
ろく質問を發し記念撮影をせられた。

△五月二十五日

朝日會館の『歌舞伎劇場圖繪展』の講演
に來阪された坪内逍遙博士は河竹繁俊氏
吉田曠二氏同伴岡野朝日主幹の案内で見
物、新裝文樂座に對して非常に好感を持
たれて満足の意を表された。

△五月二十七日

日本商工會議所臨時總會出席者懇親會の
會場となつて總員二百七十名來觀されま
した。

△五月二十七日

中川前大阪府知事が岡嶋伊八氏御夫妻の
招待で始めて文樂人形淨瑠璃を見物され
人形と共に記念撮影をされました。

△五月二十八日

この日より三十一日までを滿員謝恩奉仕
デーとして特別團體へ開放しました。こ
る異常なセンセーションを捲起し各婦人
團體、處女會、小學校、各種學校の方々
も新しい文樂を御理解下さつて多數お
見へにられました。この企ての第一回
も豫期以上の成績を擧げ得ました。ここを
厚く感謝いたします。

△五月三十日

佛國醫學文學博士ジヨージ・デユマ氏
住友の川田順氏の紹介で來觀され博士の
研究科目は精神科であるので人形の表情
を特に撮影して故國への土産に持歸られ
た。説明は松竹福井常務を煩はし人形は
紋十郎も操つた。非常に満足に面持で感
謝されました。

△六月一日

五月興行も連日滿員にて打上げました。

劇庭家竹松

たしまりゐまでつへかむ

でひ笑おなかや和

に持氣おいしがすがす

りぼんさうご

座 角

半時五と午正
演 開 回 二

招待で始めて、文楽人形浄瑠璃を見物され
 人形浄瑠璃に記念撮影をされました。

△六月一日
 五月興行は、速日満員にて打上げました。

◆文楽座御ひるき名簿募集◆

一、申込は必ず官製はがきの事。
 一、葉書には両面ともに御住所御芳名を御明記下さい。

(御住所御芳名の他一切不要)

一、御ひるき名簿作製の上御芳名に随つて種々の計劃の御通報を申上げ、且つ御優待方法を講じます。

一、會費其他一切申受けません。

一、宛名は大阪市西區四ツ橋

文楽座編輯部宛の事。

文楽座の歴史が全部わかる唯一の文獻

「文楽今昔譚」 特價 金貳圓

美しいグラフィック興味ある好讀物月刊雑誌

道 頓 堀 一部 金三十錢

美しい原色版数度刷美しい文楽座の包装

文楽の繪葉書 二枚 金十五錢

昭和五年六月五月初日

初日 午後二時開幕
 二日 午後三時開幕
 三日より午後三時開幕

二日目よりの

・御 觀 覽 料・

一 等 お座席 御一名 金三圓五十錢
 一 等 椅子席 御一名 金三圓
 二 等 席 御一名 金一圓五十錢
 三 等 席 御一名 金八十錢

一 等 お座席 御一名 金三圓五十錢
 一 等 椅子席 御一名 金三圓
 二 等 席 御一名 金一圓五十錢
 三 等 席 御一名 金八十錢

前賣切符發賣致居候

前賣切符 南四七一一番
 専用電話 七四〇八番
 電話 南 三七八八番

お草履の準備は御座りますが、靴、草履はそのまゝ御入場出来ませぬからなるべく靴、草履でお越しを願ひます。

本誌カトツ廣告掲載希望の向は文楽座編輯部へ希す

あらゆる印刷所 永井日英堂印刷所

大阪西區土佐堀一通丁
 長三〇八番
 四九四番
 九四四番
 四九四番
 (44) 堀佐土

劇
 たし
 座

若く明る顔にちる

レト白粉



東京平替平商店